

中村憲吉著  
 歌集 輕雷集  
 東京 古今書院發行

平福百穂畫伯監製  
 アララギ堂書第三十六圖

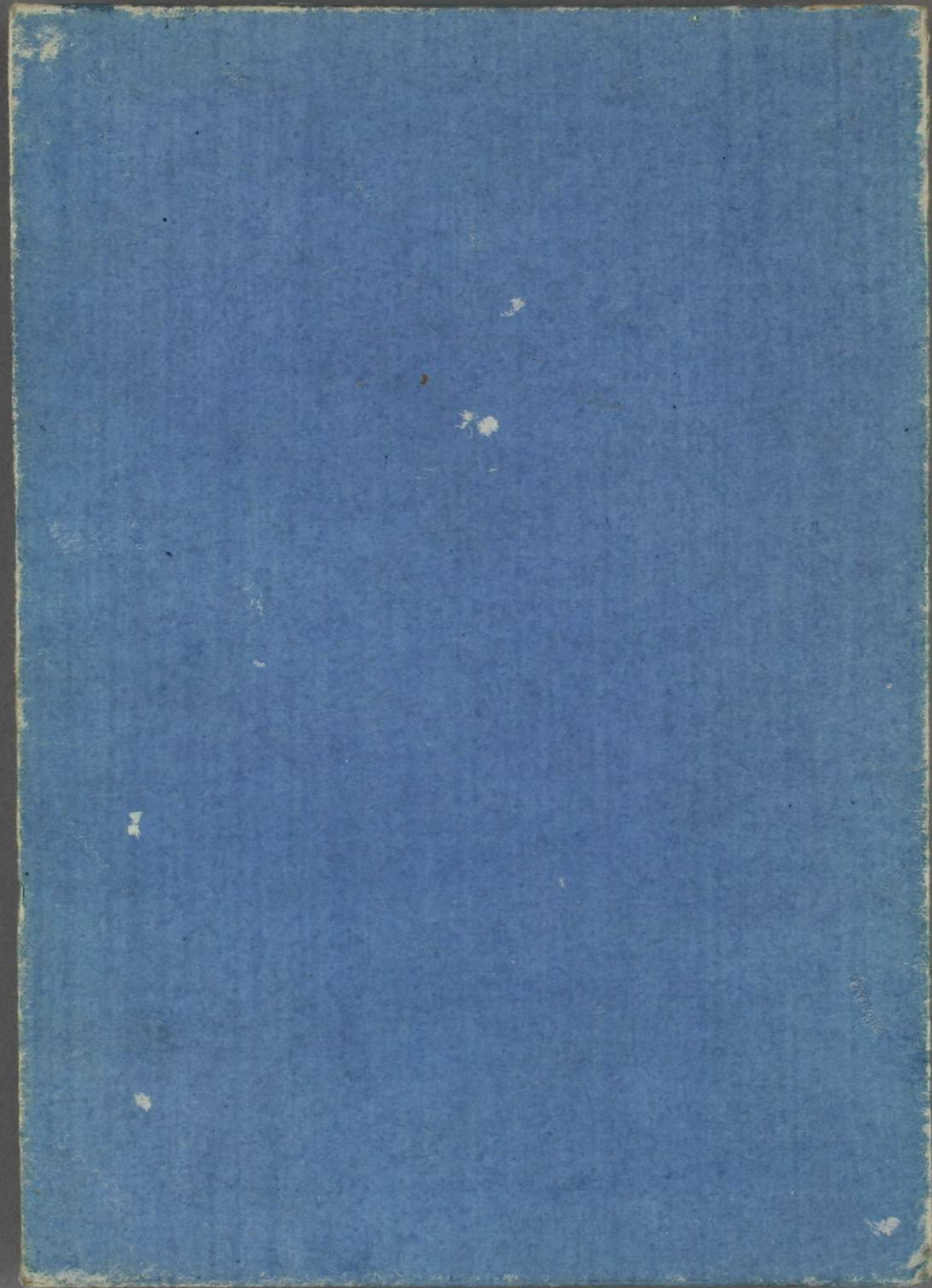


歌集  
輕雷集

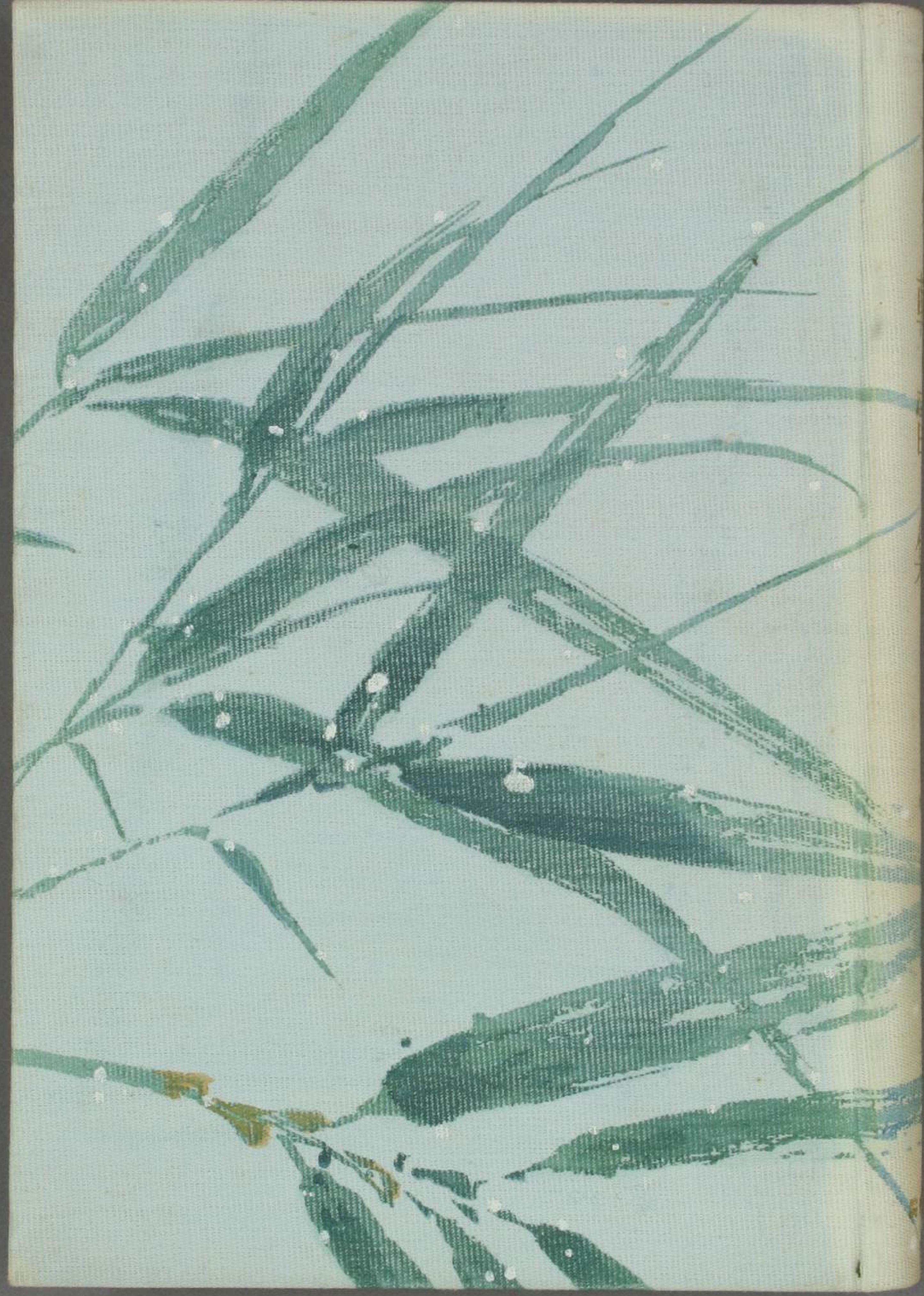
中村憲吉著

院書今古









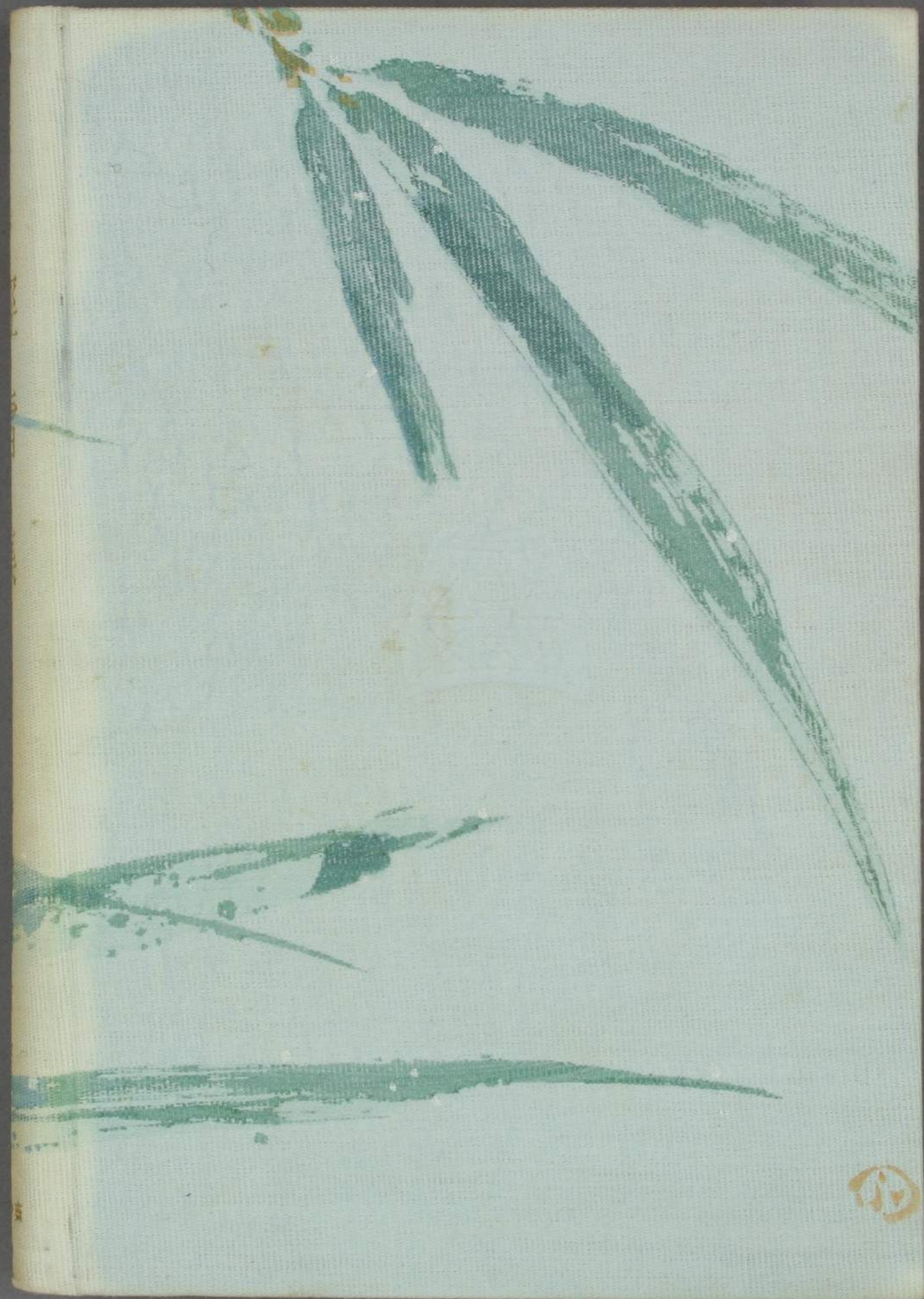


歌集  
輕  
雷  
集

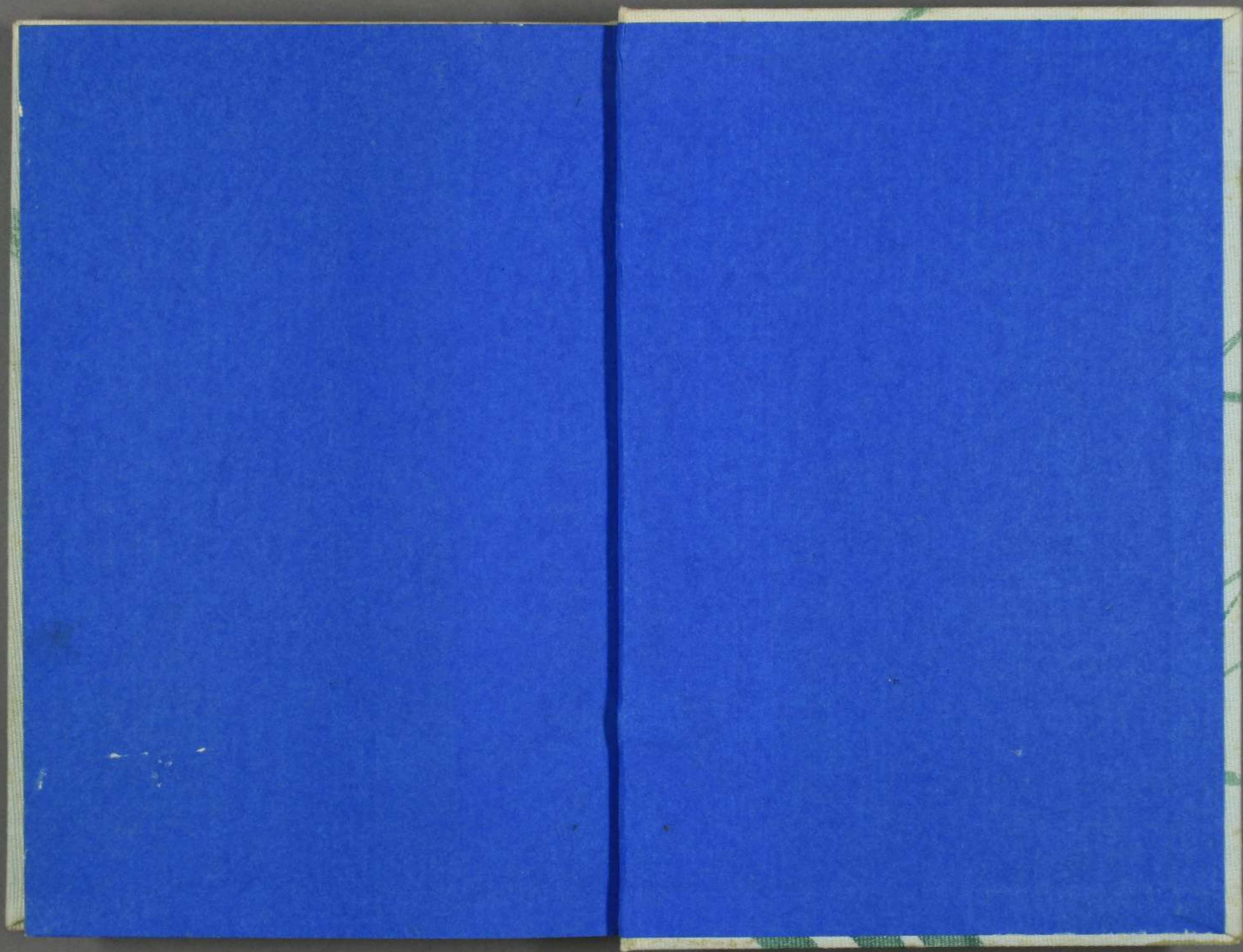
中村憲吉著

新装今百











古今圖書集成

官印古今書院發行





中村憲吉著

アララギ叢書第三十六編

歌集  
輕雷集

東京古今書院發行



目次

大正十年

大正十一年

街頭歳暮

雪の松原

冬こほろぎ

大正十二年

關東大震火災

祝左千夫先生歌碑建立

大正十三年

1

三

七

九

二三

三三



桂離宮の歌……………二四  
 月ヶ瀬行……………三二  
 うぐひす……………四〇  
 阿彌陀寺安居會……………四二  
 燕岳登攀……………四四  
 有明の溪谷……………四四  
 中房温泉……………四六  
 榎林の雨……………四八  
 石楠花畑……………五〇  
 岳頂の夜……………五三  
 山上の朝……………五六  
 梓川の上流……………五八

富士見野……………六一  
 新婚賀……………六五  
 高尾遊草……………六六  
 楓林世態……………六六  
 神護寺……………六八  
 地藏院観楓……………七一  
 榎の尾寺……………七三  
 夕川の紅葉……………七七  
 清涼殿……………八二  
 宮本二天畫鶯……………九〇  
 大正十四年  
 六甲水車村……………九三



大水車屋…………… 34  
 雑詠二題…………… 37  
 病兒…………… 100  
 折にふれて…………… 101  
 徳島雑詠…………… 101  
 阿波十郎兵衛…………… 102  
 猪山貝塚…………… 104  
 徳島千秋閣歌會…………… 102  
 土佐泊…………… 111  
 鳴門潮瀾記…………… 112  
 青松白砂…………… 112  
 大毛濱途上…………… 114

春汀旅情…………… 112  
 潮瀾俯觀…………… 111  
 夕渦潮…………… 112  
 海中の岩…………… 112  
 奔潮餘録…………… 112  
 裏淡路の旅…………… 112  
 竹島…………… 112  
 福良灣の月…………… 121  
 島の春…………… 122  
 美原…………… 122  
 おのころ島…………… 122  
 飼飯の松原…………… 120



比叡山夏安居……………一五六

晩夏……………一六一

故郷山河……………一六四

奉祝皇孫女御誕生……………一六七

河水清三章……………一七二

雪谷川……………一七三

宇治川所見……………一七五

大正十五年(昭和元年)

紀州灘航行……………一七九

船上……………一七九

有田沖……………一八一

白崎……………一八二

比井……………一八四

御坊の濱……………一八四

鹽屋浦……………一八六

荒灘の落日……………一八七

網不知灣……………一九〇

白濱……………一九一

紀の湯……………一九二

如夢庵……………一九三

松の間の月……………一九五

砂濱の鴉……………一九八

庵前曉景……………二〇一

歳暮旅情……………二〇三



磯のこほろぎ……………1108  
 崎の湯……………1108  
 湯崎雑景……………1108  
 蘆川……………1110  
 裏山の畑……………1111  
 臘月の菫花……………1111  
 海濱歳旦……………1114  
 濱木綿……………1117  
 齊明帝の御船山……………1119  
 曉の千鳥……………1110  
 水取祭……………1114  
 島木赤彦君を悼む……………1117

昭和二年

鉾池山莊……………1110  
 吉野竹林院……………1111  
 三峯頂上……………1111  
 疎音多罪……………1112  
 御大葬遙拜……………1112  
 雪國雜題……………1111  
 半夏……………1114  
 永平寺の夏……………1114  
 杉林奥の寺……………1117  
 門前浴川……………1110  
 雨後の山内……………1111



早曉行事……………二五五

國境の山里……………二五七

晩秋雜詠……………二五九

曉霜……………二六一

石井翁を悼む……………二六五

舊居尋訪……………二六六

昭和三年

年頭雜詠……………二七一

梅林の鶴……………二七二

磯海の春……………二七五

鯛網船……………二七九

遠舟影……………二七九

網子唄……………二八二

魚群閃躍……………二八四

卷末記……………二九一



大正十年  
大正十一年



街頭歳暮

大正十年の師走大阪にて慣れぬ勤に  
通ひける折ふしに

日のうちは向うへわたる夕橋をかへるにさむ  
し堂島の風



橋うへの砂吹きさらす風つよし大川にあがる  
逆しら浪

夕橋に鳥目に見えぬ人と遇ひ堂島へつれて渡  
しけるかも

年迫るあわただしさや道につれし老いし眼病  
みは米相場師なり

年の暮のあはれを知りぬ市に出て人に交りて  
わが聞き行けば

いづかしく暮れ行く年に面向ひ世さかの記事  
を書きたりわれは

諸國より世の年越の険しさの電報つづきて日  
の暮れにけり



大晦日の夜まで働きつづけけたる心さみしも灯  
なかを歸る

みづからの命を思はぬ悔おこる慌しくて年は  
暮れたり

年明けし今朝にもこのれ昨日まで市にわが出  
し惶しさの

雪の松原

降る雪は柳にたまれ垣そとの干池の底もつも  
りつつ見ゆ

出づとめに見過ぐす惜しき今朝の雪池の松原  
はすでに斑なり



降る雪のはだら松原真向ひに色しづまりて鴉  
鳴くきこゆ

松原にからすの鳴けど雪つもる干池のそこへ  
今日は下らず

垣そとに大きなる穴今日もあけりみ冬ひさし  
く乾されたる池

冬こほろぎ

冬ぬきき雨にたまたま吾はかなし心の伸びて  
つとめに出づる

玄關げんくわんに脱ぎ散らされし子らの下駄冬のこほろ  
ぎ遅のろく隠れぬ



朝なあさな玄關にわれを送る子は末娘も母の  
辭儀を覺えつ

冬の雨時じくぬくめ今朝もわが靴はく土間に  
出でしこほろぎ

雨漏りて温くしめれる壁につき冬の蟋蟀二つ  
居りけり

大正十二年



### 關東大震火災

大正十二年九月一日正午ちかく、大阪にて關東大地震を感じたれど、未だ大災害の起れるを知らず。ただ總ての通信機關その活動をとどめ、夜に入るも帝都の音信傳はらざるを怪しみ、人初めて不安の念に驅らる



み空かぜ夜に入るかぜは吹きつげど都みやこのたよ  
りもたらず聲なし

ただならぬ都にかあらむ天あめにかよふ無線電話むせんでんわ  
も言ことかよはなく

大きみの國のうれひの夜に入れり都のたより  
遂つひにきこえず

すでに聞けば富士山ふじさん帯たいに地震ちゆうしんおこり土裂つちさけて  
湯氣ゆけを噴ふきてありちふ

みんなみのグアム島より呼ばしめし海底線かいぞんせん  
も伊豆に斷きれをり

みやこべへ言ことかよふべく海にくがに術すべの盡つき  
つつ遂つひにさみしき



國こぞり電話を呼べど亡びたりや大東京に聲  
なくなりぬ

常はただ其處に思ひしすめらぎの國のみやこ  
ゆ言の通はぬ

ぬばたまの夜に入れども應へざる都はひとの  
はた生きてありや

深更に至りて、偶然に紀州潮岬無線電信  
局へ、横濱全滅、東京炎上の短報入りしま  
ま、後報また断たれて、世間再び寂然たり

國のいのちいまだ何處かに保ちたらし都のた  
より夜ぶかくとどく

横濱が焼けほろぶ云ふ聲さこゆ夜ふかくして  
潮岬より



夜のふくる空のいづこゆかよひけむ世をおど  
るかすただのひと言

夜ふかき聲に悸ゆれ國のみやこ焼け亡びつと  
言のみじかさ

遠世よりかすかなる言を聞くごとし恐しきこ  
ゑに耳をうたがふ

國のうちに生きのこるこゑ一つあり我が耳に  
ひびき大きく聞ゆ

日の本に暗き夜きたり今日をもちて國の都は  
亡くなりけり

九月二日早朝、所勤の新聞社に出づれ  
ば、夜のうちに断片的ながら大震火災  
の情報累々と集りきたれるあり



昨夜の間に岩みづのごと滴りたまれる災禍の  
しらせ皆おそろしき

人みなは愚なりける昨日の日の晝餉の飯も  
知らで食みける

日々の新聞記事は大震災酸鼻の極を  
報じて餘すなく、文字みな警讀するに  
耐へ難き慘事のみ

今日もまた日照はあつし焼土の都の人ら蔭無  
みにあらむ

朝あさの道に露けき鴨跖草やありがたく生く  
る我れを思ふも



祝左千夫先生歌碑建立

今日よりは富士見花野に雲のゐよ君が歌ぶみに  
吹き過ぐるべく

大正十三年



## 桂離宮の歌

非常の簡樸にして、驚くべき藝術的苦心の加へられた宮である。もと豊公の命により、智仁親王のために、小堀遠州が、費用、歲月、助言の三事の容喙を謝絶し、數年間一心傾倒して經營刻畫せる林泉殿亭と云ふ。前年十一月、平福百穂畫伯と共に拜觀す



あわただしき今の世に作す物ならずいにしへの林泉の大き寂しさ

天然の深處のこゑを聞くごとし人のつくりし大林泉の宮に

林泉のうちは廣くしづけし翡翠が水ぎはの石に下りて啼けども

林泉のなかに屋根の寂びたる殿づくり桂の宮をたふとくなしつ

この林泉に寂びてたふとき殿づくり屋根しづかなれど高さ床かも

殿づくりいみじき林泉にかなふべく専ら省はまきなふとく七よく配くはりたり省さたり



桂川のながるる水を引きたらひこの森の宮の  
林泉はととのふ

小桂そがつらの宮のひさしは池に向けりまへ庭に樅もみの  
大木たいぼくひとつ

住む宮をゆかしく爲すに心を用ゐ煩わづらくだしき  
を省かざるなし

御書院ごしょいんの南にひくき芝庭は日向になりて紅葉もみぢ  
の樹むら

垣のうちの庭にありながら池のなぎさ越ゆる  
木山こざに旅する趣おもむきあり

木道出て池のなぎさなり打ち敷ける小石こいしは寂  
びて海べのごとし



池の向うに御殿見ゆれど林泉のおく此處はさ  
ながら寂しき海濱

濱みちと此處を見なして作りけむ道のそばな  
る砂雪隠の小屋

御民われも家をつくらば樹を植ゑてかくつつ  
ましき水の邊の家

### 月ヶ瀬行

新曆三月十五日土曜日の勤を終へ、大  
阪より來りて、夜半伊賀上野驛に汽車  
を下る

月ヶ瀬はそこにくだらむ野のすゑの尾山がう  
へにとほき星ひとつ



いとまなき我れはきたりて伊賀の野の十日の  
月に照らされてをり

旅といへばひと夜も惜しも夜みちして月ヶ瀬  
の谷へひとりいそぐも

星月夜伊賀の國原をゆく我れは旅びととして  
心おくところなし

みちのべの枯桑畑は靄へどもなほ如月のさむ  
き月かけ

人力車を尾山にすてて、徒歩新街道を  
くだる

我がくだる小溪にかかれ幾つものかたりこと  
りと月夜の添水



尾山越えて直ちにふかき谷となれり月影ふみ  
て坂路をあやに

十日月の光おぼるなる谷のそこ見れば遠しも  
月ヶ瀬川のおと

小夜なかの谷ぞこの村の川音へ下りゆく我れ  
をひと知るべしや

きさらぎの梅の村へくだる月夜みち坂なかば  
よりはや咲く白梅

月ヶ瀬川夜霧の立つに振りあふぎ峽のそら見  
れば月のちひさし

月よみに坂路はあかし白うめの照らされし下  
をとほりて我れは



夜の目にも峽の家あひ梅おほし句のこもる月  
かげの靄

夜おそく浴花亭に泊る

旅びとに我れありにける夜更け村に宿叩きお  
こす軒の月かけに

戸のあくを待つ間もさむき軒の月ひかり照り  
そふ白梅のはな

月ヶ瀬の旅籠屋に着きしおもひふかし土間の  
手桶にしら梅の枝

下駄借りて外にいづれば月ヶ瀬橋夜の山かけ  
へ長くかかれる



夜ふかき月ヶ瀬橋を我が行けば下駄のおと山  
へひびきわたらふ

橋したの瀬なみの月にひかるかげ狭間の夜は  
いたく更けたる

月かげに見えわたる峽の梅山は咲きおそから  
し白くも見えず

更くるまで雨戸をあけて月にむかふ旅のやど  
りの軒のしら梅

月のまへに白梅のはなを見てすわりむかしの  
人になりぬるごとし

月ヶ瀬川瀬音しづみて暗くなるは桃香野へ照  
りて月移るらむ



## うぐひす

靄立ちてしづけき池か岸のうへに朝かげをな  
すふかき松原

池ばたをとほる人なほすくなけれ松かげふか  
くうぐひす啼くも

松ばらの朝靄にこもる日の匂ほひ池をへだてて  
うぐひす啼くも

ほがらなる春になるらしこの朝のうるめる空  
のちかきを見れば

朝の池に靄立つひさし松原のうぐひすの聲は  
啼きてととのふ



吾がつとめ今日もせはしと思ひつつうぐひす  
を聞けば真心さみしも

市に出で埃を浴ぶるわが春をあはつけくして  
三とせ過しぬ

### 阿彌陀寺安居會

アララギの安居會につどふ五十人大人の忌日  
に香焚きまつる

大人を知らぬもの大人の忌日におほく集ふ年  
月はつひに長けにけるかも

信州上諏訪唐澤山阿彌陀寺にてアラ  
ラギ第一回安居會開催。併せて、左千  
夫忌を營む



燕岳登行攀

昭和二年作

有明の溪谷 七月二十五日森山汀  
川、中島重君同行なり

しづかなる深山みやまを行けば都會みやこに生きてつかれ  
たる我れをおぼえ來

青山のしづけき徑みちの物おとに我が神經しんけいのおど  
ろき易し

ふか山の静けさにしみて尖とがりくるわが神經に  
おそれをおぼゆ

ふか溪に鳴る川おとは疲れたる我れのこころ  
に愛あひしくとほし



山にいらて世ははるかなり溪川たががはやあを葉にひ  
びく駒鳥のこゑ

溪川に水のみて心澄みにけり深山ふかやまに馴なれて來きた  
りたらしも

中房温泉

蟬のこゑ鳴かなくなるに氣のつけば溪ふかま  
りて風の冷つめたさ

ゆふだちの雲をひろげて雷らいおこれ頭あたまのうへの  
有明ありあけの山

高山の荒山を越えむ谷のおくに人やどす温泉ゆ  
宿しゆくあるぞこほしき



梅林の雨

大<sup>おほ</sup>梅<sup>うめ</sup>の林にとほる雨くらし稻づまは過ぐる下<sup>した</sup>  
 谷<sup>たに</sup>の霧

大<sup>おほ</sup>梅<sup>うめ</sup>の白<sup>しろ</sup>蘿<sup>ら</sup>の含むしづくさへ帽子に滴<sup>た</sup>りつつ  
 林のくらす

日のくれに似て林<sup>りん</sup>中<sup>ちゆう</sup>は雨くらし道<sup>みち</sup>さきに友の  
 かけを失ふ

うつしみは雨に暮るらむ山のうへの燕<sup>つばめ</sup>の小<sup>こ</sup>舎<sup>や</sup>  
 へはやくつかなむ

梅林いでて夕べの雨やめど偃<sup>ひ</sup>松<sup>まつ</sup>原<sup>はら</sup>を吹きとほ  
 る雲



## 石楠花畑

雨さむく雲ちかき嶺に來つらむか友は摘みし  
めす高山のはな

雨にぬれ雲にぬれたる岳のうへの石楠花畑に  
鴉飛びたる

雲はやくつばめが岳を吹くみれば山もみ空を  
翔るかと思ゆ

み岳路や足下の雲吹き断れて峻しくふかき谷  
をあらはす

天のあらし直押しに吹け雲のなかをふかき谷へ吾  
が吹き飛ばされむ



四方山の在りどに見えぬ嶺のうへはただ雲ふ  
かき空となりをり

雨ぐものゆゆしく吹ける燕岳現れつかくれつ  
迫るがごとし

目のまへの赤裸の岳に雲吹きて飛ぶほか四方  
になにもものもなし

立ちをしむ石楠花畑の目のまへに雲間ゆ現れ  
し岳の恐さ

雲のなかを日暮れむとして路行けり心遠方の  
山風に引かる

岳頂の夜



山のうへは天にちかけれこぼれくる星のあかりを手にうけ照らしむ

高山たかやまに夜よのくだてば天のはら星の明あかりはいよいよちかしも

山のうへに手にとるごとき星かげや北斗星ほくとせいかたむく白馬岳びやくばだくあたり

山やま小舎せうしゃの廁かばへかよふ徑みちに照るお花畑はなばたけのありあけ月夜

あかときあかときに月いでければ眼のまへに影ひくくなれりなれり餓鬼がき有明ありあけの山

あかときあかときに人をはばからぬ廁かばかも月の照りたる谷を見おろす



## 山上の朝

深谷があげぼのなるころならむ這ひ鳴きの  
ぼる駒雀のこゑ

小舎を出て假松谷に雷鳥のあそべる影をわれ  
は見とめし

朝づく日とほく峯上を照らし来て我がかけふ  
かく谷に落ちむとす

山のうへはほがらに晴れし朝となり天のはら  
より風吹きさきたる

天の門に今朝見おるせば國ひろし越飛驒信濃  
甲斐の山なみ



## 梓川の上流

深谷に奥處をしらぬ梓川木の間にたざち神代  
さびたる

聞くものの四邊になけれ谷がはにひとりごち  
たる吾が言あはれ

み空なる大天井岳をくだりきて瀬の音こほし  
も梓川原に

山ふかく人こぬ川はたざちをり山にひびきて  
激ちつづくる

穂高岳河にのぞみて雲吐けり雷のごとくに空  
に厳しき



しら雲を絶えず空より吹きおろす穂高ヶ岳は  
山ながら巖なり

雲吐ける巖山みれば穂高見の神のおもての恐  
きろかも

### 富士見野

大正十年秋東京よりめぐりて  
歸路をあそぶ

久びさに信濃をとほり思ひふかし富士見へ下  
りてひとり遊ぶも

おもひ出はこの國におほし年経りて我れは變  
れどこころぞ痛き



八ヶ嶺ゆ巖湧く秋の白くもの豊ゆたにひろがる國  
原にわれは

みんなみは空をさへぎる山のなし雲とほく垂  
れし富士見廣原

富士見野にひとりの旅を下りてあそび秋風の  
吹くをいたくおぼゆる

み空より雲居くだりて秋ぐさの花野にわたる  
風のくまなさ

秋かぜの富士見花原むかし来て先師せんし故友こゆうも此  
處にあそびし

秋かぜの廣野になびく八千草やちぢや晝鳴く蟲のこ  
ゑの幽けさ



此處にしてひとり寂しも道にゆるる大虎杖を  
手に折らずかも

この村にかつて遇ひ知る人はあれど秋ぐさの  
野にひとりを寂しむ

むらさきの松蟲草の花のゆれに心をひかれ居  
しに驚く

たまたまに後の徑をとほる駄馬原のとほくの  
村に行くらむ

### 新婚賀

ねぐらする糺の森の夕どりのそのかなしさに  
思ひいたらむ 福島滿帆君



## 高尾遊草

楓林世態

高雄山にわが来てさむき片しぐれ唐傘買ひて  
紅葉のしたを

酒宴人しぐれに濡れて興つきじ楓林のなかに  
三絃唄のこゑ

いとまなき人もあそびて飯食せり紅葉川原に  
洋服の父子

楓林の人ごみのなかに獨逸語さこゆ外人をつ  
れて教授らしき人



女さび紅葉賞めゆくひとの背に紅葉の散れど  
その人しらず

紅葉狩の繪によく見れど瓢もちて鬚白き老人  
今日見あたらぬ

掛茶屋を輕袷のをんな通ひをり楓林の繪にか  
くべかりける

神護寺

山上寺は、弘法大師の賜うて永日修法  
所とし給へるもの、中世文覺上人之れ  
を再興す

高雄寺の峯のうらべは谷ひろし八十山のはて  
の愛宕にむかふ

西方の偏照光にうやうやしく向ひて古りぬ山  
のうへの寺



峯のうへに夕日あまねし幽かなる谷のぼり來  
てこゑを擧げつる

おほけなき人營みし山上の寺はほとけに夕日  
照らしめき

夕雲映に諸佛莊嚴しよぶつしやうげんされてゐる國を戀ひにき雲の  
あなたに

地藏院觀楓

高雄寺の目したはふかき谷となり清瀧川のあ  
るがうれしき

谷にのぞみ楓葉もみぢの燃ゆる地藏院ぢいぢやういん西はゆふ日を  
遮さぎる山なし



入りつ日はつひに染めつつ一めんに谷の紅葉  
に燃え付きけり

紅葉せる谷へ墜ちつつ鳥のごとし土器かほらけ投なげに興きよう  
じて遊ぶ

峯のうへは片しぐれすれ愛宕山あたごより遠く夕日  
の照り來りつつ

### 梅の尾寺

日出先照高山寺は明惠上人の居房な  
り。「有るべきやうは」の制札今ものこ  
りて、聖教の上を越えて手に物取らし  
めぬごとき、微小なる非禮をさへ戒め  
給へば、面影をさながら偲びまゐらす



丘のうへの石水院に谷川のおとの聞ゆるこの  
 夕べかも

夕づきて川べにたかき梅の尾寺黄葉の谷に露  
 かかりたる

山寺の夕べはわけて心澄め谷川の音を聖人さ  
 かしき

山河はむかしながらに閑かなれ聖おはせし丘  
 のうへの寺

山河に庵りし人の起臥のあるべきやうの幽け  
 さを思ふ

我れつひに世にわづらひて静かなる生のねが  
 ひに難かりなむか



こころさへ夕べはむなし  
 牛の鳴くこゑ  
 梅の尾の黄葉の谷に

人はみな去ねよとゆふべ  
 鐘鳴りて黄葉のたに  
 煙ののぼる

寺は華嚴興隆の處と定めて、後鳥羽上  
 皇の勅額を賜はる

御ひじりを時のみかどの  
 照の山におく寺  
 歸依したまひ日出先

峽にむかふひがしを見れば  
 家まばらに見ゆ  
 黄葉斑の山畑村に

夕川の紅葉



梅の尾を高尾へかへる日の暮れは清瀧川の音  
のさやけさ

谷かげの紅葉のしたの片淵や瀬なみの鳴りに  
夕しづまりぬ

いにしへの聖はうべも山かはのかく静けさを  
求めて住みにし

山かひのここの河内はさまゆかし續ぎつぎの  
世の聖住みにき

日のくれに戻りてくれれば高雄谷ひとすでに去  
りて谷しづかなる

夕かげの紅葉のなかは音のする川ありてそこ  
に靄のなづさふ



今日ひと日此處に喧あぎし人ひと去いにて谷のせせら  
ぎ罪なきごとし

夕谷に人去いにしあと川も岸も散りたまりたる  
紅葉の多き

今日のあめに濡れし紅葉を焚たくならむ日ぐれ  
の谷に煙けむり匂ふも

我れひとり寂しくのこり夕谷の紅葉の茶屋に  
柿を食ひ居る

この谷に日ぐれてあふぐ峯のうへはなほ明る  
みに寺の残らむ

我がまへの夕谷川をいく世かも僧の渡りて山  
にかへりけむ



## 清涼殿

十月十九日 平福百穂畫伯に  
伴はれて拜す

いまの世の清涼殿に我れかしこし雨の目にあ  
りてむかしをぞ思ふ

秋雨の降りやしづけき大内の宮のふかくに静  
行く我れら

大内の御庭の砂はひろくして樹は何も植ゑず  
雨のしづかさ

殿づくり正しくかこみ庭たらへり御階のもと  
に小竹ただ二株

大うちの白砂庭へひびきゆく我がしはぶきを  
憚りにけり



現うつにもしづかに鳴れり宮のうちのうつぼ柱へ  
つどふ雨みづ

清涼殿の階たてをのぼりて鳴板なりいたの音こととするに  
足をおそれき

御住みまを我がすめらぎの遊ばししむかしの宮は  
實まことつつましき

秋雨はしぶきを置きり大まへの東びさしの簀  
の子の板に

おほらかに御座みくらありける時雨にも蒔しとみをあげて  
戸も障子なし

この殿の簀すの子ことほれば我れさへも晝ひるの御座みくら  
に近くさむらふ



身舎ぬちの御帳のかげに御衣の裾ひけりと見  
ねどかしこし我れは

通りゆく身をつつしみぬ御帳よりもし咎めて  
も聲やしたまふ

忍びたるしはぶきをせり殿ないの櫛形の窓に  
立ちゐて我れは

いとまある殿上人の居ずまひは隠れざりけむ  
この窓の下に

櫛がたのとなりの窓にくすと笑ふ人あらじか  
と今もうたがふ

大君はさむく坐さじき板敷にたたみを置ける  
夜の御しとね



さやりなく御夢守りけむ御とばりのそとの四隅にかげし御あかし

人すまぬ匂古りゆく大宮のうへの局の二間のくらさ

小暗かる燭のあかりに慣れたまひ生ひたまひける明治帝思ほゆ

清涼殿の落敷に下りて振りあふぐ時雨のそらに大きなる簷

簷したの砌ながるる御溝みづ吳竹のもとを行くがやさしき

玉しきの砂によろしき御溝みづ大内の庭をしづかになせり



宮本二天畫鷺

東寺觀智院客殿にて  
觀る

聲ありて喝するごとし壁の鷺は風を生じて餌  
を搏たんとす

大正十四年



六<sup>ロ</sup>兒<sup>ニ</sup>山<sup>マ</sup>のふゆの小<sup>コ</sup>村<sup>ムラ</sup>に水<sup>ミ</sup>車<sup>クルマ</sup>おほし大<sup>オホ</sup>灘<sup>ナダ</sup>びとの  
懸<sup>ケ</sup>けてつ<sup>ツ</sup>き<sup>キ</sup>ける

酒<sup>サケ</sup>つくる灘<sup>ナダ</sup>にせはしき牛<sup>ウシ</sup>ぐるま山<sup>ヤマ</sup>の水<sup>ミ</sup>車<sup>クルマ</sup>へ米<sup>コメ</sup>  
曳<sup>ヒ</sup>きかよふ

六甲水車村



六甲山の小だかき村はふゆ日ぬくし搗きて聞  
ゆる水ぐるまの音

山はらの水車の村に牛鳴くは搗米をはこび登  
りくるらし

この山のなぞへの村はみんなみに海見おろし  
て梅はやき村

### 大水車屋

水車屋のくらきに數多杵つけり生きてうごけ  
る物にぞ見ゆる

やすみなき音のかなしさ暗がりにかく百の杵  
もたげて搗きつ



我が邊よりこもごもとして暗がりくらに杵きねの頭かぶ擡たぐる  
げ落ちゆくあはれ

大きな馬屋うまやにやどりて居ゐるごとし燈ひのもと  
に搗うくおびただしき杵

時ときひさに白しろに落ちつつ擡たちあぐる杵きねのかうべ  
は糠ぬかつもりたり

雜詠二題

母親の病みたる幼女兒二人をば暫しばら  
く預あづかりけるが

幼こどち吾われが子こにまじり寝ねたる兒こはあそび疲つかれ  
て母ははをわすれたる



をさなきに隔てぞなけれ從姉妹どち歳同じき  
は組ぐみに寝し

はやり感冒つぎつぎ病みて子ども四人顔なら  
べ臥たり障子明り處

新聞記者の生活不規則にして繁劇な  
る、ある壯年の友の死を悼みてよめる

焼けあとの東京のバラック病院に旅にこやり  
し君をしぞおもふ

まづしくて君を人にせる母親のなげきよるべ  
き所なかるらむ

生ありておなじ爲事にたづさはりし君がよは  
ひは短かりけり



## 病兒

二階にてここに懸かるをさな兒は妻が寢せ  
しや泣きしづまりぬ

夜ゆまりに降りてのぞける病室は妻子皆寢ね  
て湯氣のゆたけさ

## 折にふれて

河の瀬の岩はなめらに水ぞ越す然おもひつつ  
我れはわすれさ

瀬の波のしぶきのかかる河の岩と知りつつ我  
れはひさしく居りさ



## 徳島雑詠

はるさめの眉山まのへましたの徳島にいらか静けき朝  
をしたしむ

我が着きし徳島のあさ雨ぬくし蜜柑植ゑたる  
街の家みゆ

旅にては寧ろしたしき國びとの訛言葉のここ  
に乏しき

むかしより浪花なないろ里さとの阿波大盡おほじん國びと藍を  
植ゑて富みにき

この街まちの何處いづこか寺の鐘鳴りて眉山まのへまざくら街の  
うへに見ゆ



## 阿波十郎兵衛

舊藩國藍を作りて富み、米麥を作るを  
 怠りしたため、國內の食糧不足は、幕府の  
 禁を破り、肥後米の密輸入によりて補  
 へり。偶々事露れて、一藩のため之  
 れが犠牲者となり、斬に處せられし者  
 に、「傾城阿波鳴戸」の主人公十郎兵衛こ  
 と、宮島浦庄屋米役人阪東氏と云ふあ

り。猪山城址に立ちてその館跡を遠  
 望す

この國の阿波十郎兵衛は庄屋しやうやなり罪被させられ  
 て死しににけるかも

生きて居ても言ひ解ときがたし大盜賊おほとうぞく阿波十郎  
 兵衛と諸國しよこくに知らる



戯作者げさくしやに書きあやまられ二百年賊ぞく十郎兵衛に  
ぬぐふ名のなし

こと知りて里びとのみは悲めり十郎兵衛館やかたい  
まに残せる

指さざして大河のしもにをしへらるる十郎兵衛  
館たちのゆふ日遠松

### 猪山貝塚

徳島貝塚は原始林猪山城址東麓街路  
のはたに發掘さる。近年のことなり  
と云ふ

猪いのの山やまに落つる眞樺まっばきゆふかたを古き貝塚に下  
りて來にけり



街となり今はのこりぬ猪山べに食屋人住みし  
 海跡どころ

穴に棲み濱べに貝を出て食みし人類の世のと  
 ほきをおもふ

城山の夕楠がもとの貝塚に旅のかたみと古き  
 貝をひろふ

いにしへは海邊なりける徳島の猪やまは楠に  
 おほき驚かも

徳島千秋閣歌會

城山に五位鷺の出て啼く日ぐれ旅の歌會をこ  
 の閣に終ふ



ふる庭の春の芝生にゆふ日染み今日の人びと  
と立ちわかかれける

云ふことの拙つたへき我れに來てつどふ人らさみし  
も初めての顔

世のなかの行きずりの旅にあふ人もひと目を  
遇ふは縁えんなりけり

この日まで海の向うに常に見て渡らざりける  
四し國こくにを來し

### 土佐泊

鳴門浦の土佐泊は紀貫之が歸泊して  
年ごろを住みしところの名にし負  
はば來よる波をもあはれとぞ見る  
と詠みしところ。尙ほ土佐日記によ



れば、任中嚴伐せる海賊の報怨をいま  
しめ、此處にても夜行阿淡の海をわた  
りて禍をさけしとなむ

しばしばを暴風雨のとまりや海のうへに追ひ  
くる賊や土佐旅日記

この島も追ひくる賊かあわただしく旅をあは  
れに人の發ちつる

土佐守任はてて兵をつれざれば海にあだなふ  
賊に追はれつ

潮さゝるの磯丘かげのひとつ寺大松がしたのふ  
るき歌碑

磯山の寺にきこえて鳴る潮のしるきは晝の闌  
くるにやあらむ



鳴門潮瀾記

青松白砂 大村吳樓、井阪吉惠、小西君同行にて

鳴門に向ふ

春のうみに淡路島かけ大きなり山には垂りて  
にぐる綿雲

松ばらを越ゆれば阿波の大浦回ややはじまり  
し鳴るしほの音

潮さるの磯畑の空に啼きて澄む雲雀のこゑの  
愛しきろかも

大毛濱途上



阿波の海に潮立ちそめぬ打ちいでて淡路島を  
見れば磯もしら波

紀の海へ潮の落ちゆく刻ならし大毛の島の磯  
あらふ波

磯に出て鳴門を見ればうごきくる青海ばらや  
白波のとぶ

波立ちて鳴門をいづる春しほのひろがりとは  
き海となりぬる

絶えずして鳴門の波の打ちあらふ大毛の浦は  
松の砂濱

旅びとの我が行く靴へ波とべど磯にうち上ぐ  
る藻の屑はなし



眼めの前に淡路のかすむ晝ふかさ阿波あ大浦おほ回わに  
は潮とよむ音

淡路島向うに大きしその磯の潮しほのとよみも聞  
けばきこゆる

春汀旅情

春の日の鳴門の濱に旅ごころ凡おほにおぼゆれ濱  
のうへの風

磯高く波のしぶけば聲あげて淡路の島を呼ば  
むとぞおもふ

孫崎まごへ弓きりなりの濱の磯づたひ潮がひを行く旅  
びと我れは



顯うつしくも磯の潮香しほかに胸ゆらげ鳴門へむかふ春  
の旅路に

旅びとの我れのみかはや磯づたひ里ひ人も鳴門  
へ春の潮見に

春まひる濱には居ると思おもひ來しに鳴門がらす  
の何處どこにも啼なかず

すでにして潮のひきゆく阿波あの門とに潮のあら  
そふ音ぞたかみぬ

潮瀾俯觀

我れも來て櫻散りがたの岬山さきの目したの海の  
いろを嘆かふ



迫門山の小松にさやぐ風出でて潮のながれの  
はやくなる音

鳴門の瀬上の海はひろびろし波立ちて潮の高  
くながれ來

天にひびく渦の鳴門と戀ひしかどただ海なか  
の川にしありけり

狭まれる鳴門に立てば海ばらは内外にわかれ  
二つのひろ庭

漕ぐ舟も下にたゆたふ阿波の門は海をさなが  
ら大河にせり

河のごと迫門にさわがふ潮見れば淡路の岸へ  
わたる舟もがも



淡路の伊賀利山にもひびけやも鳴門の潮のお  
との大きさ

山ちかき淡路をまへにこの迫門をつぎつぎに  
下る大帆かけ船

潮の飛びいよいよ早し阿波の濱や淡路の阿萬  
も波ぞひびける

騒ぎあふ潮瀬のしもは白なみの外邊につきて  
釣る舟あまた

山川の瀬はつばめ飛べどこの迫門の岩瀬は鳥  
の下りず寂しも

海にして岩瀬あらはれ川となる迫門がうれし  
も淡路をまへに



潮ひきて海ひくみかも淡路島磯ひと筋に濡れ  
しあと見ゆ

夕渦潮

裸島へ下りゆきて見れば潮の干し岩秀へか  
り落つる白なみ

鳴門の岩瀬が塞きし海ばらは二段になりて落  
ちて居りぬる

迫門ぐちは潮瀬に水の擦り合ひて湧く渦のあ  
り巻きてながれぬ

春の日の夕づくおそき飛島のめぐりの渦は大  
さくなりつ



阿波濱にあらそふ潮のなほ鳴れど逆しほはす  
 でに廣くめぐらふ

飛島は潮流のそとなり其處をしも渦と云はめ  
 や静にひろし

夕づく日淡路の島の磯なみの音のきこえずな  
 るが寂しさ

あらはれし鳴門の岩に染みて照る春のゆふ日  
 を去りつつをしむ

海中の岩

阿波の門をわたりてくれば四國なる山へ落ち  
 ゆく春日の大きさ



暮れてゆく阿波の水門に國びとと言惜しみ別  
る今日の我が旅を

日のくれの船もてとほり寂しけれ海なかの岩  
に潮あげて居り

鳴門より戻りてわたる撫養のうみ潮のながれ  
は北へかはりぬ

かへり見る鳴門のおくは廣やかに夕日照りた  
る海の庭みゆ

ゆふ潮と海は満つらし遠さへの鳴門もいまは  
潮飛ばず見ゆ

しかれども海の真なかはなほ残る潮のながれ  
に我が船かたぶく



日のくれの鳴門をよぎる我が船の笛のこだま  
は波にとよまふ

船のなかに今日の陸路のつかれ出てねむき日  
ぐれを波よばふこゑ

淡あはしく暮れゆく空をひとすぢに淡路へか  
かる阿波山の雲

奔潮餘録

鳴門の狭隘を出でし海ばらの潮のせめぎや波  
ぞ飛ぶなる

磯かげに乾せる若布のほひにも旅の情は思  
ひ染むもの



砂濱が岩磯となれば波あらし潮が揉むなる磯  
海苔の香や

春しほの音ちかくなりし磯のやま小松がみち  
に雉子立ちしおと

山したの迫門にきこゆる春潮の川瀬のごとき  
音はかなしき

島々は潮瀬のそとに散りばひて白なみに遊ぶ  
潮見舟かも

紀へ向きて海をながるる大潮瀬川かすめる末  
も波立てり見ゆ

大鳴門の流を下りて遠行ける舟の白帆はなほ  
揺れてをり



海なかは大潮瀬川押して行けど釣舟のかけは  
や納まりぬ

夕しづかなる鳴門と思ひて渡れるに海の眞な  
かはなほ潮の川

### 裏淡路の旅

竹島 福良の湊に竹島と云ふ周圍四  
町ばかりの小島あり。壽永の春平家  
一門一ノ谷より落ちて暫く據りしと  
云ふ。島上には安德幼帝の行在所跡、  
敦盛首塚などと傳ふるものあり

常盤木の島山の宮は何時の世か誰がつかへけ  
む南にむかふ



島山の磯の海にはあまた散り椎の古葉が浮き  
て神さぶ

静けさを島山に居れば樹を透きてめぐりの海  
の下に見ゆるなり

かしこくも申さば此處の假宮は幼みかどの飯  
ごとの宮

竹島の雨にを濡れて宿らししをさな帝のみ舟  
をぞ思ふ

日は西に没る海あれどこの君の御舟の泊てむ  
陸はあらざりき

島山に日がさす朝や姥芽櫓をしきりに潜る目  
白鳥のこゑ



參議經盛はこの地にありて、直實より  
送られたる、愛子敦盛の死首に對面せ  
りと傳ふ

竹島の敦盛塚に石ひろふ我が頭上にて五位鷺  
の啼く

泣かずして猛たけきもせむや己しが討ちし人の子の  
首をその父におくる

君がために古つはものの熊谷くまがが世をなくさま  
ぬ人となりなき

羽は叩たたきて島山にかへる五位鷺はめぐりの海に  
餌えかあさりけむ

福良灣の月



丑三つはものの音さへふけて行く福良の灣の  
二十一夜月

ひとの寝てしづけき浦と出てあるく宿屋の裏  
の磯のうへの月

月も出よむかし平家の落ちびとの浪まくらあ  
と福良の灣に

よるべなき平家の舟を居らしめし四國に向き  
てこもりたる海

假宮に坐せしみかどと思ひ出れば月夜の磯に  
竹島が見ゆ

いにしへの幼なみかども偲ばしし浦回の月は  
缺けにけるかも



寝ねがたき福良の夜半に月見れば平家こもり  
し灣しづかなり

月夜照り鳴門の潮は流れめど此處は島ふかく  
波ぞおよばぬ

海のうへの月のあり處やかかる夜に小宰相を  
ば潜かしめけむ

おぼる夜の海に潜きてなづさひし人のいたら  
ば月の宮かも

入江にて月のひかりが波に曳きちかくに黒し  
洲崎松原

福良には月影ふけしうしろ山いにしへさびて  
夜あらし出でぬ



## 島の春

淡路は川のともしき國なれや旅をわが來てい  
まだ渡らぬ

春の空ひくく下りたる島のうち田畑ひろくて  
國しづかなる

大松竝櫻の咲ける國衙のみち島なかにしてこ  
の古路あり

島山は四方に低けれ淡路びと躑躅折り持ちみ  
ちに出遇ひ來

島にして小汽車のゆけど山ひくく田畑のうへ  
に静かなる音



降りて來し汽車は音して村に消ぬ春あはれなる島の旅路に

美原 このわたりは往古應神仁徳天

皇時代の放牧御獵の地なりと

大君の牧の美原としぬび行く村路のはては海にくだりし

旅にあれば春耕せる畑木にも心ひかるる頬白のこゑ

あこのろ島 榎並には國土創生の

磯駁盧島、天の浮橋などと云ふ所あり。

何時の世に誰がなぞらへて敬ひ初め

けむ。頬白つぐみ等に交りて知らぬ

小鳥あまた土坡の森に啼く。里人に

聞けどもただ『火打のり』とのみ答ふ



誰<sup>た</sup>ぞや呼<sup>よ</sup>ぶ田<sup>たん</sup>圃<sup>ぼ</sup>のなかの春<sup>はる</sup>川<sup>がは</sup>の天<sup>あめ</sup>の浮<sup>うき</sup>橋<sup>はし</sup>わた  
り來<sup>こ</sup>と呼<sup>よ</sup>ぶ

あはぢの破<sup>お</sup>駁<sup>お</sup>廬<sup>ろ</sup>島<sup>じま</sup>は田<sup>い</sup>にありて火<sup>ひ</sup>打<sup>う</sup>のりとふ  
里<sup>さと</sup>鳥<sup>とり</sup>のなく

飼飯の松原

村<sup>むら</sup>みちは飼<sup>け</sup>飯<sup>ひ</sup>野<sup>の</sup>に入<sup>い</sup>らし松<sup>まつ</sup>のなか砂<sup>すな</sup>地<sup>ぢ</sup>のおく  
に大<sup>おほ</sup>寺<sup>てら</sup>のあり

松<sup>まつ</sup>原<sup>はら</sup>にほかにも村<sup>むら</sup>のあらめども眼<sup>め</sup>のとどかざ  
る飼<sup>け</sup>飯<sup>ひ</sup>の松<sup>まつ</sup>ばら

浪<sup>なみ</sup>の音<sup>ね</sup>濱<sup>はま</sup>にしづかなり松<sup>まつ</sup>ばらが明<sup>あき</sup>るくなりて  
さやかに聞<sup>き</sup>え來<sup>き</sup>



松ばらを四五町も横断り來らむにいまだも海  
へ出でぬ松原

飼飯濱はひろき松ばら寺もある村路に立てど  
海はきこえず

古びたる松原のなかの海寺に耳の土器何の願  
かや

市村へわが乗る人力車かへらしめ松ばらのな  
かに錢を與ふる

春の日は松にあまねく照りそそぎ音きこゆが  
に静けき松原

砂ひろき大松濱に鳥見えねど海鳥の羽の落ち  
しを拾ふ



いにしへの大松原は我れひとり來つとおもふ  
に居れる人ごゑ

松のおくに話やみたり洋服のわが現はれてお  
どろかしめたる

この廣き飼飯松原は松露探る里人母子ただ二  
人なり

松濱に飼飯びとと遇ふしたしさや教へられつ  
つ松露をば掘る

人のぬ飼飯松原にあふ母子旅に忘れし我家  
をぞ思ふ

吾がこゑを何邊へむきて呼ばなむや廣くしづ  
まる飼飯の松原



## 比叡山夏安居

比叡山上寺にアララギ歌友と籠るこ  
とあり

夏山のふるき大寺にこもらひて  
 安居あはれ  
 夏山のふるき大寺にこもらひて  
 一百餘人の歌

あかときの四時に鐘して起きいづる山寺のそ  
 らや星ちかくあり

僧堂も何處に隠ると知りがたく一山にわたる  
 大きしづけさ

鳥じものここだく啼けどひるも夜ももの  
 のしづけき大き夏山



夏やまに鳴くとり聞けばうつし世をこころに  
忘れ居るべかりける

青ぐもの山寺にゐて遠したのひと里見るはあ  
はれふかけれ

左千夫十三回忌に併せて長塚節ほか

歌友三人の追弔會を山上大講堂に行

ふ。略されたれども式は古き法華懺  
法なり

山寺に来てゐる今日は香華して思ひを致すは  
るけき人に

かそやかに呪印をむすぶ指鳴らせりほとけに  
向ひ僧のしづけさ

蓮花にかへ懺法堂に撒くものを木の葉にせる  
が山寺さびつ



おほ杉のかげ映えてふかし講堂に懺法のこゑ  
しづかにそるふ

焚く香のけむりなびけど目のあたり人かへる  
べき世にあらなくに

磬をうつおと稀にすれねむり足らぬまなこに  
向ふ御燈のゆれ

晩夏

眞夏日の照のちまたに身ひとつを行きしひた  
げて悲しきわれは

巷をばい行くあつさに汗ながれ今朝もいたみ  
し下痢をおぼゆる



まつびるの街のおとこそ寂しけれあつきひか  
りの降りみなぎりつ

ひと夏をうつつもなくて働はたらきし疲つかれをふかく身  
にもつとおもふ

上衣うわぎぬぎ椅子いす子こにかけつつなほ暑あつしつかれ過ぎ  
たり我れのからだは

街空まちぞらに颪たふ風の雲湧うわきつぎて暑あつしと云へど秋あきち  
かづきぬ

街もはや夏のおそきか路みちのうへに柳の揺るる  
このごろの風

この頃の埃ほこりじみたる路みち樹じゆにさへ街の陽ひざしは  
いろばみにけり



## 故郷山河

山國は夏の夜ながら露けかれ奥吉備にはてし  
私設鐵道

停車場へ降りればすぐに匂ふなる麻野は刈ら  
れ夏ふかみたる

夜の町へ黒さかけひく山邊より夏川の音ひろ  
がり聞ゆ

かへり来て夜のすずしさ山がはに星ぞらを浸  
すこの國原は

ふるさとの山がはの町は夜霧して空にいざよ  
ふ十日餘の月



少年せうねんのわれ山河さんかに親おやしみて此處こゝに學まなべり二十にじゅう年ねんまへは

過ぎ行いける生命いのちをおもふ高谷山たかたににあな傾かたむける  
片割かたわりの月つき

天霧あまぎりひ月夜更つきよけゆく町まちの外とは四つよっの川がはの波なみが  
騒さわがふ

奉祝皇孫女御誕生

天あまつ日ひの御女みめと現あれさし國くにばらの黄葉あきばがうへ  
に匂におひたまひぬ

日ひの御父みちち月の御母みははの誓約ちかひもて玉たまに生ならせり貴たから  
玉たまの姫ひめ



日の御女の産の御衣と山がはの黄葉を織りて  
今日はささげむ

新御ひかり豊蘆原のくまぐまに幸はふ民の聲  
ぞおこれる

おのづから幹樹をゆする歡は百葉の感りて鳴  
りふるふ云ふ

豊秋の神祝ぎ棚に燈をあかし今宵を祝ぎて民  
らありなむ

ふか秋の今宵の月にむく草にみめぐみの露置  
きて足りこそ

下さまに祝ぎまつるには非ねども御親となら  
しし心かしこさ



日の朝庭榮ゆく代かも御祝ぎもち四方の國よ  
り使のかよふ

御悦を御近き臣らさもあらばあれ下つ御民は  
いや度ひぬ

御父として初めて御子のこゑ聞かす大御胸思  
へば海さく如し

世の親の子を思ふなさけ知り足らはし御こ  
ろはふかく民に向はむ

吾が家の小釜に今日は赤の飯焚きてつつまし  
く民ながら祝がむ



河水清三章

皇孫内親王御降誕に寄せ奉る

冬さりて御國の河は落葉せず日の大御孫の産湯に足らふ

神ながら御日女の現れしこの國は河と云ふ河に朝日よそほふ

御身かげは天の安河の朝霧のにほひやかにと生ひさせ給へ

雪谷川



ふるさとの雪谷川の粗みづに若みづを汲む  
く年振ならむ

初日かげ雪にほへる山峽は霧を生み  
なかの岩

雪川は山の鳥さへ下りて来ずいよよ眞澄の川  
となりぬる

宇治川所見

宇治川に螢の出でむ季となりその河岸に山吹  
散るも

ほととぎす五月に来なく宇治山の米漸が瀬へ  
のぼる舟もがも



宇治川の山蔭にして菖蒲花舟に植ゑしを水に  
浮けたる

降りて行く宇治興聖寺木の間路ゆ川に流るる  
水はやく見ゆ

大正十五年 昭和元年



紀州灘航行

船上 大正十四年師走なり。明けて  
の年には障なく職を辭しなむと思へ  
ば

勤<sup>つとめ</sup>にもころ暇<sup>ひま</sup>ありこの冬は妻子をつれて紀<sup>き</sup>  
伊<sup>い</sup>に旅<sup>りょ</sup>すも



みなみ紀の温泉の濱につま子等といのち延び  
むと友の家を借る

甲板のへさきに艦に追ひさがし捕へかねたる  
吾子らの遊び

ゑらぎつつ走りし子らもわれの居る甲板に來  
ず船暈ひやしぬらむ

有田沖

はろばろし夕照る海の雲居にて舟の行くなき  
土佐の島みゆ

鷹島はゆふ日真正面に照れる島西のほとけを  
戀ひし人思ほゆ 高辨上人



有田の川かみ山の淋しきは蜜柑のすでに  
挽がれたるらし

白崎

白崎の重山のうへに舞ふ鶯は雲なほさむし海  
にくだらざ

渡津海の入りのしみる白崎に家こそあらね  
おらぶ潮なみ

比井

船つかず比井の湊を過ぎ來しが馳出の鼻の大  
芒薄濱



日の御崎を船すぎゆけばいささかの眞風もあ  
らぶる紀伊の海ばら

御坊の濱

日高山おくがに曇れ松ぼらの御坊の濱はあぐ  
る白なみ

御坊沖に船はとまりて浪間より榜ぎくる舟を  
汽笛によばふ

解舟して榜ぎ來榜ぎさり乗りかはる湊みなと  
の人のしたしさ

御坊町は河湊なり干潮時を白なみ立つは砂ひ  
ろみかも



干潮時の日高川ぐちに風つよし砂洲に浪のう  
ち重きてみゆ

鹽屋浦

鹽屋浦かもめ群れとべ磯にでてさわげる人ら  
網引すらしも

浦びとの地引の網のまはりには魚をとらふる  
鷗とびをり

人のなかに鷗むれとび鷗のなかに網引するこ  
ろ漁士少女ども

荒灘の落日



夕づける海路よ見れば陸山に雲さむく寄りて  
たむろせりける

陸さむく入る日は波にひたれども夕映照らぬ  
陸くらきかも

海原のはたてに沈む日のかげは己が大きなる  
形體にて暮る

眼かひの海俄かにくらし入りつ日はつひに白  
くぞ燃えて落ちぬる

海なかの入り日の波に暗く飛びし千鳥の群は  
行きかくろひぬ

波のうへをわたらふ千鳥うつし身はつま子を  
つれて海路の旅を



日沈めば海路はひろし彼方此方に暗くなりゆく波のかげろひ

網不知灣

夜のうみを南の紀伊に船つけば冬といふともぬくき國かも

畠島のうへに懸れる月ほそし本船を降りてくらき波間に

白濱 この地は古く齊明帝、持統帝數代の行幸の湯所なり

月稚き紀伊の温泉濱のしら砂を小暗くふみていにしへ戀ふれ



冬の夜を風ぬくくして白濱の松に聲なし月の  
照れれど

おほきみの昔行幸の湯濱にはともしかれども  
照れる月かも

紀の湯

如夢庵 旅の宿りに白濱の別業を、わ  
がために貸し給ひたる、友の家兄の情  
のくさぐさ

今宵やどる旅のやどりに活けたるは紀伊のみ  
冬の山つつじ花

夜旅してつきたる庵にわがために焚きのことさ  
れし香のうれしさ



眞夜中も身體からだにのこる湯のにほひ松風ききて  
起きぬたりけり

わがそばにゑらぐ吾子わがこらよ旅の夜に妻子をつ  
れし親しみどころ

うつそみに暇いとまを得たる旅やどり妻はあまたの  
子の母たりき

たづさへし寝間ねま着きに子らをかへしめて旅にさ  
みしき宿りするかも

松の間の月

白濱の旅のいほりに假寝かねせば夜半よな起きてみる  
松の間の月



庵の外は松かげの見ゆる白良濱浪のおとして  
十日月昏し

下濱に太平洋の波なごむらし心したしき音は  
きこえぬ

旅の荷を解きしばかりの夜ぬくし羽織をぬぎ  
て妻は居にけり

旅の夜の松間の家をめぐらしみ兒らは居しか  
どはや寝入りたる

いにしへの白濱の月を見つつ寝む冬の夜やど  
る松の間の家

月夜にて砂庭にうごく樹のかげは鴉ねむらぬ  
松にかもあらむ



## 砂濱の鴉

鴉よりはやく下りゆき下濱したはまに今朝もあそべり  
吾が子のかげは

明けがたにここだ下りけむ松濱まつはまは砂をみだし  
て鴉の足形あしのがた

砂はまは朝しづかなり昨夜よるつきてここを歩み  
し足あとのなし

朝はやくわれも濱邊はまべへ出てゆきて砂濱すなはまのうへ  
の吾が子と呼ばふ

寄る波はなほくらけれど子どもらよ渚なみづたひ  
に濱の湯へ行かむ



濱の湯の戸口に朝は砂たまれど昨夜みちし湯  
に塵ひとつなし

小舎の窓になみしぶく見ゆ裸にせし子を抱き  
おろす岩底の湯に

磯岩の限れる底の玉湯にはわれ親子のみ長閑  
にひたれる

庵前曉景

昨夜の間に雨ふりたらむ砂庭はあかときにし  
て松の葉の露

あかときの玻璃窓にくらき外濱は砂しづかに  
て人のとほらぬ



松濱に下りゐる鴉<sup>からす</sup>あけがたの餌<sup>えさ</sup>をば漁<sup>あそ</sup>りてま  
だ鳴かぬらし

ほほじろの聲はかすかに木にすれどあかとき  
くらし砂濱の松

松の間を海へおりゆく道ひとつ電燈<sup>でんとう</sup>ののこる  
朝が寂しき

歳暮旅情

家にあらば煤<sup>すす</sup>はく歳暮<sup>さいぼ</sup>のせはしさを旅にてわ  
れの忘れつつゐる

ふるさとゆ今年もおくる餅<sup>もち</sup>の荷<sup>に</sup>はわが家につ  
きて解<sup>と</sup>かずかもあらむ



旅をやどる庵にうれしき注進かざり餅あくり  
て晦日づかひ來

## 磯のこほろぎ

湯崎路のなぎさは崖の榎吾に寒潮かかりこほ  
ろぎ鳴くも

湯の涌ける磯の岩間はぬくむらむ冬の眞なか  
のこほろぎのこゑ

いぶかしく波打際に聞きとめぬ岩にこもりて  
鳴くこほろぎを

静けさがこころに沁みぬ磯岩のわれ目のおく  
にこほろぎのこゑ



## 崎の湯

海あれて潮のうちこむ日のあらむ崎の磐湯に  
小屋かこひあり

天然の岩にしたしみひたる湯にとどろきふる  
ふ荒磯のなみ

崎の湯のわがまへの磯に浪をあぐる太平洋の  
空はてしなし

滑らなる岩はだに觸りて吾がひたる御湯は古  
りにし玉湯とぞおもふ

海さよく磐湯は靈しもいにしへに櫛とり浴み  
し臣をとめども



とほつ世の女帝をみみかどをなくさめし紀伊の行幸ゆきはこ  
の湯にありき

暮れかかる崎さきの湯にゐて見てをれば土佐の伊  
島じまにともる燈臺

湯崎雑景

海にむく石垣うへの家いえ竝なみは葦簾あしざりかこへれ冬  
ごもる街

道したに波のしぶくぞしたしけれ鶴つる鴿かぎのとぶ  
赤岩あかいはのむれ

冬の日を湯のわく海にもものあらひ湯崎ゆさきをとめ  
の脛むねの下りたつ



## 蘆川

海にいる小川はぬくき湯の香して冬を枯れざ  
 る大蘆あしのむれ

竹たけに似て蘆あしのしげれる濱はま川がは千鳥せんじうのくるか今  
 朝あさもあさあびあれあり

野の井いに噴ふく温泉おんせんをくみにゆく朝あはやし田いにゐ  
 る千ちどり濱はまへとびたる

## 裏山の畑

山やま畑はたけの大楠おほなはのもとをとほりしが暴風雨はうふううにこも  
 りし蔦いすずさやぎけり



大楠のした一ぱいに黒實落ちたりなかばは鳥  
の喰みおとしたる

臘月の堇花

龍膽の枯れずにくる櫟木丘日向のくさにす  
みれを摘みぬ

秋ぐさに春のはな副へ摘まむとは思ひよらざ  
りき南紀の濱に

雪ぐにに生ひて知らざれ冬もみぢ櫟木が丘に  
たんぽぽ咲くを

みなみ紀の湯泉の濱につま子らと花すみれ摘  
め冬とおもはず



## 海濱歳旦

昨夜の浪のをさまりてゆく朝ぼらけ茜にほひ  
て潮氣立つ磯

潮氣立つ白良の濱の朝日かけ若湯を浴みに濱  
ゆく我れは

初日かげ濱にほへど波はるけき太平洋のう  
へになほ朝の月

朝濱としづけき靄のなかに鳴く初日がらすは  
渚へゆくも

海のべの初日に染みてつま子らと幸はふ命我  
れはねがはむ



元日ごうにちの太平洋たいへいようの浪なみよく晴はれて濱はまを吹ふくかぜ朗らう  
らにながし

波なみしぶく磯いその岩いわ湯ゆに入いりに行いかな我があとに  
つきて子こらよ濱はまを來こ

昨日きのうの夜よにふけてを來こしが濱はまの湯ゆは晦み日かと早はや  
く戸とを締しめたりし

濱木綿

冬ふゆながらくまなく明あき海うみのいろ瀬せ戸と崎さきの濱はまに  
はま木ゆ綿ふを掘ほる

山やま越こえて來こる人ひとのなき岬さき濱はまに子こどもをつれて  
濱はま木ゆ綿ふをほる



歌にきき名を知る木綿を今日われは砂ふかく  
 手掘る花はあらねど

冬の日と思へむやぬくさ背に透り濱にも掘  
 りぬるが久しき

しづむ日が波をさそひて寒まざば猶のどなら  
 む無人の濱は

齊明帝の御船山

椎楠のくらす岬山に雨のごと鳥ぞ騒げりかし  
 こき船山

いにしへの聲おこらむか百どりを踏みおこし  
 ゆくくらす忌森に



常盤木の忌森のおくは時すぎて紅葉たもてる  
木のしづかなる

曉の千鳥

磯のうへ明けそめにけり濱の湯にゆきてひた  
らむ今朝もしづけく

下りたちて渚にすればあかときの小暗き海に  
沖津しら波

潮ひきて海ややあらしあけがたは湯崎の磯に  
波おとひろし

あかときの干潟のみづに映りたる星かけ見れ  
ば四邊さみしき



あかときの干潟がたにのこる潮しほみづに千鳥ちどりのをり  
て物しづかなる

あさの洲すに千鳥ちどりうごくはくられど潮しほのたた  
へにうつるその影

渚なみゆく千鳥ちどりをみれば砂すなのうへに足のすばやさ  
すべるがごとし

うち寄よするなぎさの波なみにつつと行きあさる千  
鳥ちどりよ行きもどりつつ

千ちどりらの渚なみあゆみて行くみれば乾砂かみは踏ふま  
ず飛びて越こゆなる

旅たび馴なれし土地とちのあげがたは心こころやすくひとの來  
ぬ間の濱なみの湯ゆにゆく



## 水取祭

昭和三年作

大正十五年早春、奈良にきたることありて、二月堂水取祭を見る

時雨して奈良はさむけれ御水取なほ二月堂に  
行を終らざる

うちつづく春さむくして信濃なる友のやまひ  
のたのめ無きころ

病む友を遠地に思へばここに來て今日の日暮  
もわれは歎きつ

夜の杉に雨の音してこころ附くや鹿の去りた  
るみちを來にける



如月きさらぎを奈良ないにしへの御ごほとけに浄きよき阿闍あ闍か井み  
 を汲くむ夜よにぞあふ

雨あめのなかの良りょう辨べん杉すぎよ子を尋たずむる母はは一生いっせいをと  
 めて遭あひにさ

おろかなる益えきをたのみて御ごほとけの加か持ぢ香かう水すい  
 を友とものために貫つらふ

島木赤彦君を悼む

面おもてかげに聲こゑに其その處ところらに君きみ居ゐりと思おもふが悲かなしさ  
 正ただにあらぬに

我が都會生活もやめなむとする日の  
 ちかづけば折やふしに



あわただしき心を過ぐる寂しさあり友をはふ  
りて時ゆく今に

亡き友のいのちを思ひしづかなる生活に入り  
て我れはありなむ

なほ事忙しく暮しつるうちに

飯の間は心におもふ暇ありてまた思ひいたる  
かへらぬ人に

五月二日、京都市黒谷瑞泉院にて、赤  
彦追悼會をひらく。寺は故人のか  
つて淹泊せるところ

足やみて來ませるもあり遠人も今日を集ひて  
君をしのべる



## 鉾池山莊

戸を繰りて間もなき縁におびただし松の花粉  
の吹きたまりたる

狭庭なる二もと松が花もちて二階へ屋根へ粉  
をこぼす花

うら侘びて我がゐる昨日けふの日も松は花粉  
をしきりにこぼす

世のなかに我が友死にてしづかなる思をのこ  
す今年の春や

ゆく春を池にむかへる松ばらは松に咲きたる  
花しづかなり



松ばらの花の粉吹きて池をわたる昨日やけふ  
 の黄ににぐる風  
 鉦池の大松原は息づくか池いちめん花粉を  
 敷きぬ

吉野竹林院

夜の山に聳啼けり錫杖を留めて我れは聞きに  
 けるかも  
 大松の木ぬれに夜風どよむ時むささび啼けり  
 竹林院の庭

三峯頂上



三つ峯に見下す秩父奥ひろし四方をめぐりて  
雲垣の山

疎音多罪

故郷にかへりて住めば人びとへ疎くなりつつ  
我れながら悔ゆ

消息は忘るるならず書かむ手の鈍きがゆゑに  
筆をおこたる

我が事の多くなりたる思あり故郷の家にあま  
たの家族

山國の吾にねもごろに言葉賜ふひとに返詞も  
わが怠りつ



言寄せてわれの歸住を惜みいふ人はあれども  
それも忘るる

村びとの己がじしなる生きざまに日々にした  
しむ寂しみながら

われ等より二月まへに歸したる子らの言葉の  
すでに訛れる

昭和二年



御大葬遙拜

おほきみの御大葬おほきみの過ぎながら雪はますます  
降りてひそけさ

舊臘二十一日より雪大いにふりし  
きりけるが



雪ふかき山國やまくににゐて大正の御代のかへらぬを  
はりにぞ遇ふ

わが友を大正の御代の末かたにをはる歌人うたびとと  
惜みて念おもはむ

隣村役場に先帝崩御の電報を配るた  
め、大雪山中、途に斃れし女配達人、近き  
出雲國にあり

雪ふかき山おくの里へ大御代の替かへりを觸れに行  
きて死にける

まづしくて兒をやしなへば文使ぶんつかひに深雪ふかきゆきをかし  
ぬ手弱女たをんなにして

寡婦やもめにて貧しと云へど亡骸なきがらに二幅ふたのなきまで身  
をしのびたる



## 雪國雜題

雪ごもり倦<sup>あ</sup>勞<sup>ぐ</sup>みて村の札<sup>ふだ</sup>付<sup>だ</sup>者がまた手<sup>て</sup>博<sup>あ</sup>奕<sup>ま</sup>を  
はじむるらしき

雪ふかく山なか三里隔<sup>へ</sup>し町ゆ魚<sup>う</sup>賣<sup>ま</sup>りに來<sup>こ</sup>むみ  
ち絶えにけり

降りやまぬ雪に稼<sup>かせ</sup>げず村びとのたれかの家は  
飯<sup>い</sup>に餓<sup>う</sup>ゑなむか

子らの行く學校も雪にやすみたり朝<sup>あ</sup>餉<sup>け</sup>に餓<sup>う</sup>ゑ  
てくる學<sup>ま</sup>童<sup>ご</sup>ありとふ

雪に餓<sup>う</sup>ゑて鳥おほく里にいでにけり子供の手  
すら易<sup>やす</sup>くとらへつ



大雪にひさしく開けぬ炭窯へ路ふみに行きひ  
との斃れし

雪山に今年も出たる熊は尋め櫃田のやまに見  
失せしと云ふ

雪晴の大谷山にさわぐこゑ何の毛物を追ふに  
やあらむ

半夏

あくれたる梅雨ぞいたりて田植すみ山がはの  
里しづかになりぬ

田植過ぎてなほさみだるれ隣國の半夏の市へ  
牛のぼるころ



梅雨ふかき山かひになく牛のこゑ旅出がへり  
 のころにぞ沁む

山かひのさみだれに濡れて旅をする市行牛は  
 蓑をつけたり

さみだれは暗きながらに宿驛路へこゑきこえ  
 くる山ほととぎす

永平寺の夏

杉林奥の寺

山なかの大禪寺のおく谷は植田のあるが物し  
 づかなる



人里はちかくにあれど谷の戸を杉のとざして  
寂かなる寺

谷の入りふかからずして田畑あり大禪院のも  
ちてこもれる

夏行僧いく百こもる寺なれど杉に蟬なき晝の  
しづけさ

衆僧をこの大道場にたもたむに先づ糧をあつ  
ることの難かる

志比谷寺にいたたく飯や御開祖の食事偈誦み  
て心つつしむ

ころも着てあはれなるかな山門へ野良の作務  
より僧かへりけり



志比谷の大禪院にきて薪水のいとなみもする  
 修業僧あはれ

門前浴川

いく日の夏籠づかれ夕かたを寺門の川に下り  
 て水あぶ

この夕は風呂をはぶきて門前のながれにひた  
 る杉のしたびに

谷川の石のにほひのかすかなれ水かみかぜの  
 吹き通りつつ

杉の樹に啼くひぐらしは溪おとと耳にひとつに  
 入りてしづけし



谷川のながれの石に枕して胸越すみづを嬉し  
みにけり

頭より川みづ浴びてすがすがし物のつかれを  
洗ひておとす

夕谷にみづ浴みをれば奥田より寺門のそとへ  
かへる里人

杉のうへの空にうごけるしら雲はいづべの谷  
に行きをさまらむ

雨後の山内

雨すぎし雫のあつれ杉の秀ゆ夕日さし入り  
庭のしづけさ



ひぐらしを一時き急きて鳴かしめしばかりに  
谷の雨すぎにけり

梵鐘の音いまだ撞かざる山内は夕齋まへの明  
るさにあり

蒸しむしと谷のゆふべの明るきはなほ雨雲の  
去り切らざらむ

暑き日のゆふぐれ方のいとまどき浴堂にのぼ  
る僧のつらなり

ひぐらしの谷のみ寺に今日もこもり静かに過  
ぎし事のうれしき

早曉行事



殿堂は下にいく重もくらく見ゆ祖師廟いづる  
 後夜のあけがた

あかときの雲堂の行事をはるらし殿鼓堂鐘相  
 呼びおこる

あかときの山内にして雷のごとき法鼓おこり  
 て心のふるふ

### 國境の山里

あしびきの山田の家にやどかりてわが奥山へ  
 今日も入るなる

國境のわが山に来て添水搗く山家を宿にふた  
 夜ねむりぬ



客部屋は厩まにつづきぬ階下かには添水そもつきて  
水足る山家やまが

おくまれる山田なれども己が田とみな作る宿ある  
主じこころ足るらし

山里は秋めくはやしこの宿に蚊帳かせぬ夜寝いを  
すがしみにけり

晩秋雑詠

門かどに出ば眼めにいる四方よの黄葉もみぢさへそこはか散  
りて秋のみじかさ

家ごとにかまけて過ぎぬかくしつつ世にうと  
くなりて行くべきものか



父母の家を吾が住み繼げばものごとは簡単ならず思ふがままには

しづかなる願はむなしつぎつぎに煩ひごとのおほきわれかも

時雨経て紅葉はふるしふゆ庭の石燈籠に散り  
のこりたる

四方山に霜おく日らのすくなけむ今年の黄葉  
けだし寂しき

曉霜

今朝の霜いたく置くらむ宿驛には戸をあくる  
おとのいまだ稀なる



あかときの霜ふむ人は美しかも昨夜のねむりのよく足りぬらむ

寢寐がたき夜をなやみぬ吾がくせの寢酒をやめし寂しさのみならず

日ならべてころの憂さやかかりごと彼もこれもの捨て置きがたき

あきらめに似たる思に吾がなりてあかときがたの眠に入るも

あかときと夜やあくるらし西山に空ゆくからす鳴きつつきこゆ

いね足らぬねむりを續がむあかときの冷えし炬燵に火をかき立てて



つとめての宿驛路しゆくせきぢになにか言いひのこし行く旅たび  
人ひとあり聞きのさびしき

おしなべて霧のとざせる家や竝ならには板屋いたやの霜の  
いちじるく見ゆ

宿驛路しゆくせきぢに枝をたれたる枯柳かれやなぎに霜の眞白まじろさこの  
朝あしかも

朝あぎりりに荷積にひさししき馬まぐるま馬まのたてがみ  
霜しもおおきにけり

朝あ日照り霧きりふふきくれば馬ま嘶なきて宿場しゆくばぐるまが  
發たちつつ行くも

石井翁を悼む



足るを知りひとを度ふことを知りいまはの齡よはひ  
 足りたまひける

舊居尋訪

山ぐにをたまに出で來てもと住みし隣家たづ  
 ぬ今ものがさきたさ

とりわきて思ひ出ねども來てみれば舊住みし  
 土地戀ほしきろかも

池の家の門べの路にあそぶ兒ら去年はわが子  
 もかくて遊びし

池ばたの家群のすまひ變らざれ聞き知るこゑ  
 のなほしつつあり



朝暮をわれに枝垂れしもとの家の柳のしたを  
 来てとほりたり

日のくれの池の吾家に兒の泣くは勤めがへり  
 の胸にしみにさ

旅にして世過をしたる思出のよみがへりくる  
 ころの痛さ

昭和三年



年頭雑詠

あらたまる年とは思へど片づかぬ物わづらひ  
の今年も續がむ

今日ひと日雪ふらざりし元日ごめんじつも日ぐれとなり  
て風あれにつつ



歳徳神へ今朝のまゐりの雪みちの清し小川を  
ゆめに見て寝む

梅林の鶴

岡山後樂園所見

竹むらより老梅林に吹きこゆる風はさむけれ  
花の遅るる

梅の園いまだ咲かねば枝がちで木の間はさむ  
し枯芝のいろ

枝がちで蕾ながらの梅の園しら鶴を清く居ら  
しめにけり

春さむき梅の疎林をゆく鶴のたかくあゆみて  
枝をくぐらず



老梅林ほつ枝はさむし然れども日向に這ひし  
枝は開きぬ

梅林の外にて鶴は羽ばたけり芝生につくる  
影のおほきさ

芝庭ははるかに廣し飼鶴の舞ひ立ちあそび下  
りるによろし

磯海の春

朝がすみ舟こぎ出れば河ぐちは海たひらにて  
とほきしら雲

朝なぎと船おほく浮きてもろもろの帆のかげ  
ながし海にうつりて



風かぜぎわたる海の庭にわには亂みだれでて島づたふ舟あ  
また居る見ゆ

くが山の段々だんだん畑はたけの除蟲菊ぢゆちゆうきくしろく咲きそめて春  
ふけにけり

磯いそやまを眞まぢかく漕こぎぬうぐひすは畑はたけのうへ  
の山にして啼く

春はる明あききうれひおほゆれ磯山の郭公かくこうどりは海に  
さこえ來

磯かげの海にたむろし羽は叩たたくは去いにおくれた  
る鴨にかもあらむ

釣つりぶねへ舟こぎよせて魚買ひぬ海に遊びて晝  
のちかけれ



海<sup>わた</sup>なかの舟<sup>ふね</sup>に炊<sup>か</sup>ぎの火<sup>ひ</sup>を焚<sup>た</sup>けばひるの火<sup>ひ</sup>焰<sup>のほ</sup>の  
いろぞさみしき

舟<sup>ふね</sup>にして炊<sup>か</sup>げる飯<sup>いひ</sup>の潮<sup>しほ</sup>の香<sup>か</sup>や熱<sup>あつ</sup>きを吹<sup>ふ</sup>きてむ  
さぼりて食<sup>く</sup>ふ

山<sup>やま</sup>ぐにに常<sup>とこ</sup>あくせくと居<sup>ゐ</sup>るわれは今<sup>け</sup>日<sup>ふ</sup>海<sup>うみ</sup>にあ  
りて物<sup>もの</sup>をわするる

磯<sup>いそ</sup>山<sup>やま</sup>に映<sup>か</sup>ゆる若<sup>わか</sup>葉<sup>は</sup>を海<sup>うみ</sup>にみて過<sup>か</sup>ぎしむかしの  
命<sup>いのち</sup>をぞおもふ

鯛網船

遠舟影



春 開けて瀬戸内海を打ちのぼる鯛網ぶねとい  
 づ 邊にあはむ

鯛網の船の居處を求めこぎぬ島じまかすむ内  
 海の沖に

遭ふ船の帆かげちかより大きなりその舟びと  
 に物言ひてすぐ

釜焚木ひる餉をたくと舟に積みこぎ出てうれ  
 し朝風の海

正午ごろを海にさがせし鯛ぶねと走島のちき  
 に傍ぎてあひける

百ぶねの奥がの海にひろがれる船の列あり網  
 曳すらしも



海なかのこゑほがらけし霞みつつ鯛網船は見  
のとほけども

網子唄

海の庭ひろらに網をおろすらむ輪にわかれこ  
ぐ二方の舟

大網をひき重りぬる親船は碇の舟の漕ぎとど  
めをり

おろし網ひろく曳くかものどかなる網子の呼  
びごゑ沖に久しき

もろ舟のひとつに寄りて網たぐる聲せはしけ  
れ網曳終ふらし



網ぶねの鱸うぶねのやぐらに采配さいはいをふる親方おやぢのふね  
に漕ぎて着ちかけしむく

網船あみぶねにひきあぐる網濡あみぬれれわたり真まあたらしき  
潮しほの香かぞする

魚群閃躍

船ふねにゐる人ひとかけ海うみにうごかざれ漁歌いさりうたやむ沖おきの  
しづかさ

親おやぢぶねの櫓うしほのしたに網あみたぐる網子あみこの裸體はだかの揉も  
みあひて見ゆ

船ふねあひに曳ひき狭せまめ來こし網あみのなか魚いさなあふるらむ  
水盛みづもりあがる



網に溢れひらめき跳ぬる魚ふとし網を高めて  
かこひつつ捕る

漁あみに祝樽酒なげ入れて樽のしたびに魚は  
しるみゆ

こころぐく我れは見てをり綱のなかに音して  
跳ぬる魚のあへぎを

網の魚たまに大きく跳ねいでて船板におつる  
音のおもたさ

つぎつぎに船に手ばやく鉤きあぐる魚みどり  
にてみな鱒なり

鯛ぶねのこの曳く網に鯛ともし五月のすゑの  
鱒季節かも



大群おほぐんにさまよふ鯛たいや行く春はると播磨はりまの灘なだへいり  
終はつへなむか

祝いわぎ酒さけの返かへしの魚ういをもらひたり海うみのうへなる  
風かぜ習なうしれたしき

船ふね板いたのうへに緑みどり色の鮮あざやけき貫つらひしままの鱈たらを  
裂さかす

潮うしほ風かぜのいく日を海うみに起おき臥ふして酢すに餓うし網あ子こに  
夏なつ蜜みつ柑かんやる

ひる飯いひを焚いきはじめつつ去さる網あ船ふねと海うみのとほ  
くに別わかれぬるかも



## 卷末記

私の第三歌集『しがらみ』は大正十三年七月の發行であるが、歌は大正十年までの作でとめてある。だから、その後約十年間の歌が溜つて居ることになる。數年前に一度岡田眞君に依頼して、それ等の歌を書寫して貰つたが、その時には歌數四百首に満たず、歌集の出版は見合せた。然るに今この集を編まうとする時、歌數意外に多く、一千首を越ゆるに至つて居る。まだまだと抛擲して居るうちに、到底手頃の一冊の歌集には、收め切れぬ歌數に達して了つたのである。今これ等を思ひ切つて嚴選して、六七百首程度の歌集にして、了ふのにも、未練があり、迷つたする、この集に収録する歌は昭和三年前半期の作までとし、残りのそれ以後の歌約四百首は、別な機會に新作を加へて一集にすることにした。従つて



本集の歌六百七十餘首は、殆んど原數に近いと云つてよく、寧ろ約十首ばかりは新しく補造した歌である。なほこの他に大正十一、二年に亘り、匿名で『サンデー毎日』に載せた『財界諷詠』七八十首あるが、これは他の歌と品種も違つて居るので、夾雜を避けて本集には收めぬこととした。

歌の配列順序は、強ひて作歌年順によらずに、大體を作歌事件の發生年代によることにした。『燕岳登行』<sup>攀</sup>の歌の如きは、事柄は大正十三年夏のことであつても、歌に作つたのは三年後の昭和二年である。この他にも『富士見野』『水取祭』などあるが、總てこれ等は特別の例外であつて、大抵は事件のすぐ後か、又は遅くとも一年位の間にはそれを歌にして居る。作歌年順に配列することは、作風の變遷など一目瞭然たらしめて結構なのであるが、さうすると私の歌は、同題下に入るべきものと他の歌とが交錯して、頗る體裁を損じて讀みづらくなる。

それにこれ等一部の歌で、しかもその僅かの作歌年月の間で、私の作風の變化なると云ふものは、大して目立つものもない。だから、結局自分の便宜で備忘に資するため、事件年順に歌を配列することにした。

相當の年輩に達し多少は世故に通じたつもりでも、人間としての未熟さは、何處までも多分に私に残つてゐる。然し大正十年大阪で慣れぬ勤めに通ひ出したころの私を考へると、今でも氣恥しいほど世なれぬ未熟者であつたことを思ひ出す。私は十一月一日から大阪毎日新聞社の經濟部に入った。最初二週間ばかり校正の見習ひをさせられ、そこで時の首相原敬氏の刺殺事件に出會ひ、さう云ふ時の新聞社内の混雜と緊張と、迅速とに對して、新米の私は、茫然と驚駭の目を瞭つたことを覚えてゐる。月末頃からは受持ちを與へられ、外勤へ廻された。歳暮の金融界一入多事なのに私は途方にくれたものである。學校で習つ



た經濟學などは、新聞の經濟記事には何等の役に立たない。その方面の勉強もやり直さなくてはならぬ。いま迄呑氣な日を暮して居た私には、かくして俄かに煩劇な生活の日が來た。境遇の變化による感激はあつても、當分は歌どころではなかつたのである。

爲事にもなれ環境にも落ついて、再び歌が作れだしたのは漸く二年後の大正十二年末ごろからである。それ迄には作歌二十首位しかない。十一月央平福百穂畫伯が、關東震災後、大阪毎日新聞主催の美術展覽會の出品審査のため京都に來られた。その時私は伴はれて桂離宮を拜觀した。林泉殿樹の高致なる、私は強くその藝術的情趣の豊かなるにうたれた。而して永らく抑鬱せる私の歌どころも、ここに再び勃然と蘇つて來るかの如く感じた。『桂離宮の歌』以後には私の作歌は俄かに多くなつてゐる。震災の歌が出來、月ヶ瀬の歌が出來る。高雄、榊尾、清涼殿の歌と、かなり油がのつて來たらしい。『清涼殿』の歌は、これま

た平福百穂畫伯に伴はれ、黑板博士の厚意によつて、この禁裏を拜するを得た賜の作である。

然し再び作歌に親しむに至つたと云つても、やはり煩劇な新聞社生活を續けて居るので、さう思ふほどに歌に力は注げなかつた。毎月の作歌が遅れるため、發行所からはよく督促の電報をうけた。はじめは推敲不足の所を、後から訂正する心算で急いで原稿を送つたが、のちには私の疎懶のためその儘になつて了つたことが多い。云はば一種の未定稿とも云ふべき、さうした歌がかなりあるので、今まで機會ごとに修正を試みたことがある。又この歌集を編むときにもそれ等は十分修正する考であつたが、扱て愈々となると、後から直した部分は、却つて一首のうち、落著を缺いて來る。結局は原形に復したものが多かつた。作歌の時から相當年數が經ち、當時の細かい氣持や印象が朦朧となつて居るために、修正に困る點もあるが、しかし心忙しく作歌したやうでも、やはりその當時は



かなりの苦勞をして作つて居るのである。一見不満不安定のやうな語句でも、そこにある動かさないものを掴んで居るのであらう。

大正十五年四月に私は新聞社をやめ、六月には山間の郷里に歸つた。新聞社生活中には折々厭な目にも遇うたが、しかし私には大變よい社會教育となつた。ある場合作歌の障りにもなり、感情も荒み頭も散漫になるやうなこともあつたであらうが、私はこの四ヶ年半の生活を敢て悔としない。これより曩一月に島本赤彦君が病み、三月には奄然として終に長逝した。十七年間の親しい友である。私はふかき寂寞を感じた。辭職はかねて通じて置いたことであるが、私は靜かなる生活に入りたい希望が、これから一層強くなつた。

郷里での生活は新聞社での如く煩劇ではないが、一家周圍への氣配りや雜事に相當うるさいものがある。私の身邊は必ずしも居村の自然界が閑寂なる如

くに靜かではない。ただ從來の如く、始終物に追ひ立てられるやうな落着かない生活から逃れて、靜かに自分を眺め得る生活に入つたことだけには息をついた。私は郷里にかへり着き、此處で持ち越しの『紀の湯』『燕岳登攀』などの長聯の歌を整理し完成した。何だか久しい間の負債を一時に済したやうで、多少の無理の作があつたかも知れぬ。ことに『燕岳登攀』の歌は三年前のことなので、印象が薄れて居て、感興に乗つてくるのになかなか骨が折れた。そして苦勞した割合に効果が擧つて居らぬ。私の當時の感動は今少し深く強く潑刺たるものであつた筈である。

私の歌は元來が拙修の道を踏んで居る歌であつて、『馬鈴薯の花』然り、『林泉集』『しがらみ』然りである。歌の草稿などは人に見られて恥しい程に眞黒の改削を加へて居る。而してなほ生硬を脱し得ないのである。然しこの苦吟



遅作になやむ私にも、大正十三年はじめの『桂離宮の歌』『關東大震災』あたりから、少しづつ作歌に安樂な道が開けて來た氣がする。恰度『しがらみ』の歌をまとめて了つた頃のことである。この頃作歌のうへで多少でも、私に豁然と會得の行く所があつたとすれば、それは『しがらみ』編輯の苦心に伴ふ副産物であらう。

凡そ歌集を編むものの快味は、全く舊垢を洗ひ落して、それを一轉期に新境地へ躍出しようと思ふ所にある。然るにこの『輕雷集』を編むに當つて、私には未だその點で充分瀟洒とした氣持なれないものがある。この編輯だけでは、今迄の私の歌全部が清算されるといふ譯に行かぬからである。昭和三年後半から今日に至る三年間の歌約四百首がのこつて居て、何時までも槽が喰喰付付いてゐるといふ感がある。何れこれからの作と合せて、一冊の集にまとめて瀟洒しんさうとなる外はあるまい。

本集を出版するについては、例の如く平福百穂畫伯に高雅なる裝幀しやうせんを加へて頂き、齋藤茂吉、土屋文明兩君からも種々な御配慮に預つた。ことに土屋君には校正の勞まで取つて頂いた。何れも忝かたじけなくしとせねばならぬ。なほ本集の淨寫をして下さつた岡田眞、岸哲夫君の御厚意、間接に御同情を蒙つた岩波茂雄氏、及び本集の刊行に熱心に御努力下さつた古今書院主人の御高情に深く感謝申上げる。

昭和六年五月二十六日

備後布野の里にて、行春の草茶を吸りながら

憲吉記



中村憲吉著作

歌集『馬鈴薯の花』 古今書院

『林泉集』 春陽堂

『しがらみ』 岩波書店

昭和六年七月廿二日印刷  
昭和六年七月廿五日發行

歌集 輕雷集  
定價 貳圓

著者 中村憲吉

發行者 橋本福松  
東京市神田區駿河臺西紅梅町拾壹番地

印刷者 菊地眞次郎  
東京市牛込區市谷加賀町壹丁目拾貳番地



發行所 東京市神田區駿河臺西紅梅町拾壹番地

古今書院  
振替東京三五三四〇番

秀英會印行



アララギ叢書目次

第一編	鳥木赤彦著	馬鈴薯の花	古今書院發行 定價一圓八十錢
第二編	齋藤茂吉著	赤 <small>くわろ</small> 光	絶
第三編	古泉千樞著	屋上の土	改造社發行 定價二圓五十錢
第四編	鳥木赤彦著	切火	絶
第五編	齋藤茂吉著	短歌私鈔	絶
第五編	齋藤茂吉著	續短歌私鈔	絶
第六編	中村憲吉著	林泉集	春陽堂發行 定價一圓八十錢
第七編	齋藤茂吉著	童馬漫語	品
第八編	鳥木赤彦著	氷魚	岩波書店發行 定價二圓五十錢
第九編	長塚節著	長塚節歌集	品
第十編	齋藤茂吉著	あらたま	春陽堂發行 定價二圓四十錢
第十一編	伊藤左千夫著	左千夫全集	絶

第十二編	松倉米吉著	松倉米吉歌集	古今書院發行 定價一圓五十錢
第十三編	土田耕平著	青杉	古今書院發行 定價一圓八十錢
第十四編	石原純著	霞日	品
第十五編	中村憲吉著	しがらみ	岩波書店發行 定價一圓八十錢
第十六編	鳥木赤彦著	歌道小見	岩波書店發行 定價一圓五十錢
第十七編	發 <small>アララギ</small> 行 <small>所ギ</small> 編 <small>大正十二年 震災歌集</small>	灰燼集	古今書院發行 定價一圓八十錢
第十八編	鳥木赤彦著	太虚集	古今書院發行 定價二圓二十錢
第十九編	村上成之著	翠微集	古今書院發行 定價二圓五十錢
第二十編	土屋文明著	ふゆくさ	古今書院發行 定價二圓三十錢
第二十一編	鳥木赤彦著	萬葉集 <small>の鑑賞及 其批評</small>	岩波書店發行 定價二圓
第二十二編	岡麓著	庭苔	古今書院發行 定價二圓五十錢
第二十三編	鳥木赤彦編	アララギ 大正十三年度 年刊歌集	岩波書店發行 定價一圓五十錢
第二十四編	發 <small>アララギ</small> 行 <small>所ギ</small> 編	故人歌集	近刊
第二十五編	齋藤茂吉著	つゆじも	近刊



第二十六編	齋藤茂吉著	金槐集私鈔	近	春陽堂發行
第二十七編	齋藤茂吉著	良寛和歌集私鈔	近	刊
第二十八編	齋藤茂吉著	童牛漫語	近	刊
第二十九編	門間春雄著	門間春雄歌集	岩波書店發行	定價二圓九十錢
第三十編	平福百穂著	寒竹	古今書院發行	定價二圓二十錢
第三十一編	藤澤古實著	原竹	岩波書店發行	定價二圓六十錢
第三十二編	島木赤彦著	梯蔭集	岩波書店發行	定價二圓五十錢
第三十三編	發ア ラ行ラ	所ギ編 アアラキ 大正十四年度	年刊歌集	近
第三十四編	發ア ラ行ラ	所ギ編 アアラキ 大正十四年度	故人歌集 3	近
第三十五編	岡 麓著	歌話話 代々木雜筆	集	近
第三十六編	中村憲吉著	輕雷集	古今書院發行	定價二圓
第三十七編	發ア ラ行ラ	所ギ編 アアラキ 大正十五年度	年刊歌集	岩波書店發行 定價一圓五十錢
第三十八編	結城哀草果著	山麓	岩波書店發行	定價一圓三十錢
第三十九編	高田浪吉著	川波	古今書院發行	定價二圓三十錢

第四十編	齋藤茂吉著	短歌寫生の說	鐵塔書院發行	定價一圓七十錢
第四十一編	發ア ラ行ラ	所ギ編 アアラキ 昭和二年年度	年刊歌集	岩波書店發行 定價一圓五十錢
第四十二編	伊藤左千夫著	左千夫歌論集卷一	岩波書店發行	定價四圓
第四十二編	伊藤左千夫著	左千夫歌論集卷二	岩波書店發行	定價四圓三十錢
第四十二編	伊藤左千夫著	左千夫歌論集卷三	岩波書店發行	定價四圓
第四十二編	伊藤左千夫著	訂増 左千夫歌集	岩波書店發行	定價三圓五十錢
第四十三編	土屋文明著	往還集	岩波書店發行	定價一圓八十錢
第四十四編	發ア ラ行ラ	所ギ編 アアラキ 昭和三年年度	年刊歌集	岩波書店發行 定價一圓五十錢
第四十五編	竹尾忠吉著	八衢	古今書院發行	定價二圓
第四十六編	高田浪吉著	作歌餘錄	古今書院發行	定價二圓六十錢
第四十七編	齋藤茂吉著	念珠集	鐵塔書院發行	定價二圓
第四十八編	發ア ラ行ラ	所ギ編 アアラキ 昭和四年年度	年刊歌集	岩波書店發行 定價一圓五十錢
第四十九編	加納 曉著	加納曉歌集	古今書院發行	定價二圓二十錢
第五十編	齋藤茂吉著	短歌初學門	近	刊







